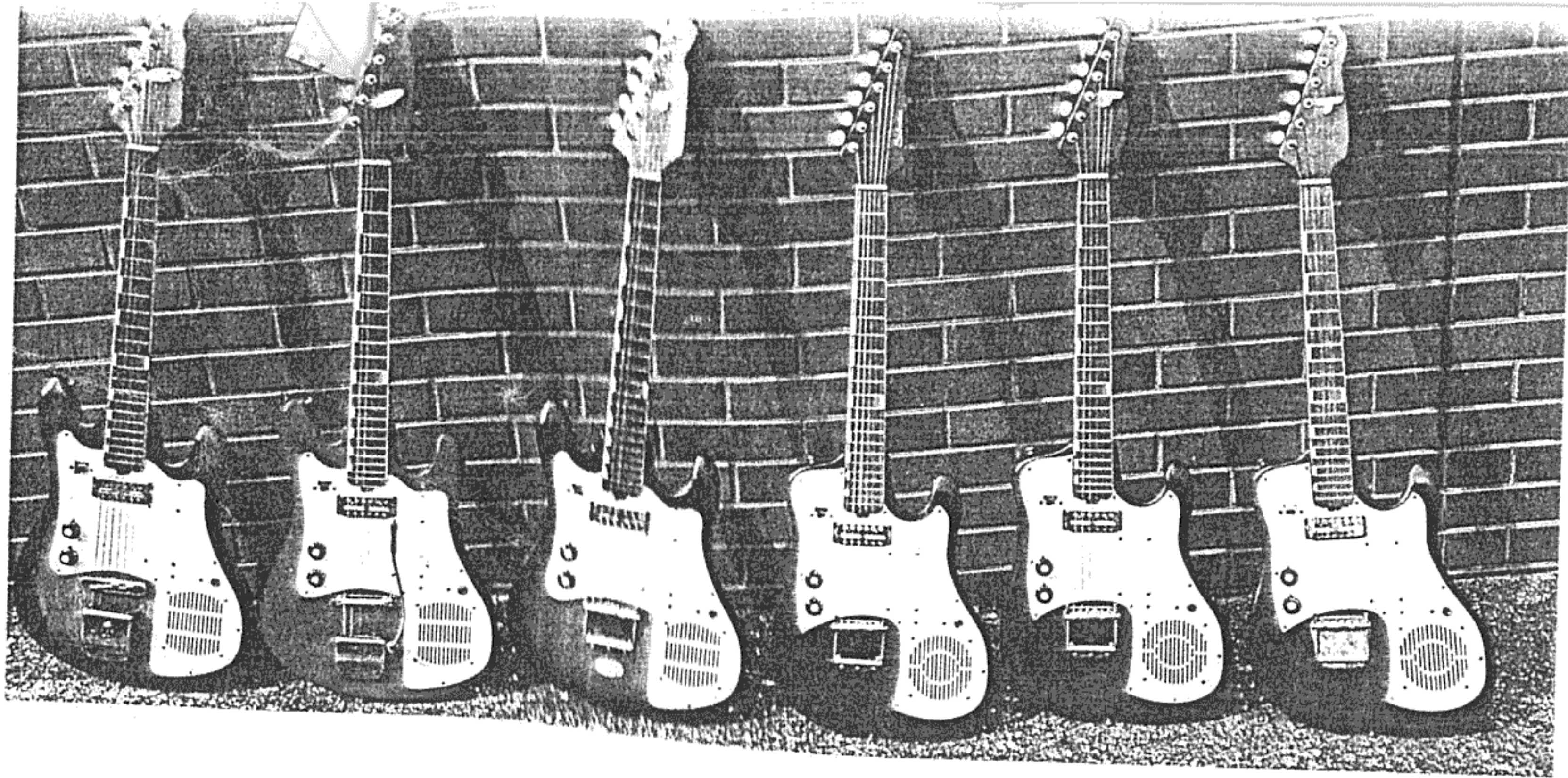




S P E C I A L P R O G R A M

TELSO

テスコ物語

60年代前半の史上空前のエレキ・ブームをリードし、
大輪の花火のように華々しく咲いて散った、愛すべきギター・メーカー、テスコ。
その数々のユニークなモデルは多くのキッズを魅了し、今なおギター・マニアの心をくすぐっている。
エディ・ヴァン・ヘイレンが初めて手にしたギターもテスコであった。
デイヴィッド・リンダレーは今でもメイン・ギターの1本として使い、
ライ・クーダーは“ベストなエレクトリック・ギター”とまで呼ぶ。
日本が誇る奇跡のギター・メーカー、テスコの人特集をじっくりと味わっていただこう。

取材・文／編集部



TEISCO PLAYERS

Photo: Kohichiro Hiki

DAVID LINDLEY ——— with K-4L ———



テスコには実に妙なハイ・エンドがあって気に入っている。
ボスのコーラス・サウンドとピッタリ合う。
とにかく魅力的なサウンドでなければダメなんだ。
特に見かけのいいものを集めているわけではないよ。



RY COODER——with Spectrum5——

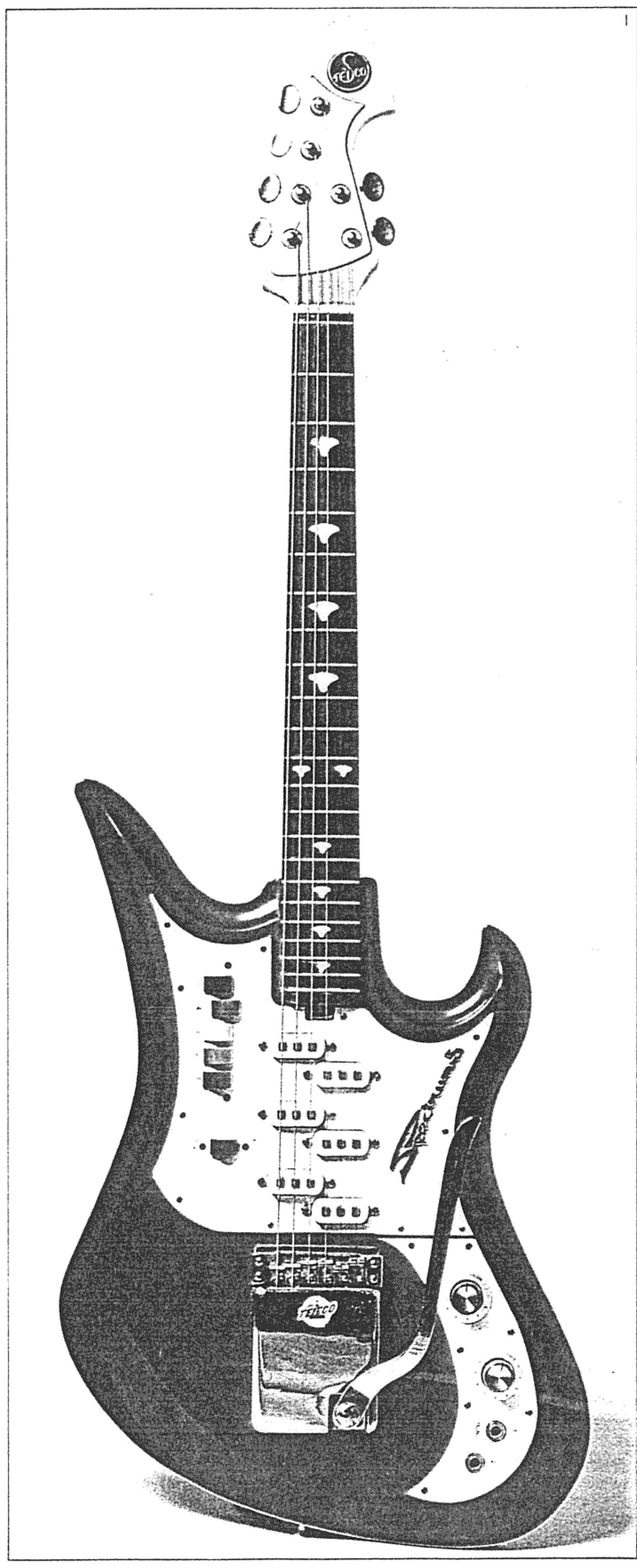


テスコって知ってる？ 日本のギターだよ。
60年代に一度素晴らしいピックアップを作ったんだ。
ステージ（90年の来日公演）でも底のところにスピーカーが付いたものを使ったよ。
ベストなエレクトリック・ギターだ。
そのテスコのピックアップはどのギターに付けてもいい音がするはずだよ。



TEISCO SOLID GUITARS

Spectrum 5



スペクトラム 5 は昭和41年の中頃に発表された、テスコ・ソリッド・ギターの最高級モデル。41年と言えば、かのエレキ・ブームも終焉を迎えようとしている時であった。この年の6月、ビートルズが来日し、時代はエレキ・ブームからグループ・サウンズ・ブームへと移行していくのだ。

スペクトラム 5 は、ボディ形状、ポジション・マーク、4:2 のペグ配置を持つヘッド、スプリット・タイプのピックアップ、艶やかな配色を施したスイッチ類、ボディを縁取ったカーブ（いわゆるジャーマン・カーブ）など、どれをとっても確実に時代の先を行くギターであった。しかし、その斬新なデザインのゆえか売れ行きは比較的芳しくなかったという。かえって発表から25年を経た今、立派に新しいギターとして通用すると思うのだが、いかがだろうか？ 前ページでライ・クーダーが持っているのはこの青色のモデルであり、エディ・ヴァン・ヘイレンはこれと同じモデルを所有している。アメリカのギター・ワールド誌1990年2月号の表紙及び付録のポスター、またプレイヤー誌1990年5月号表紙でエディのスペクトラムを見ることができるので手に入れる機会があったら見てほしい（ちなみにエディの最初のテスコはこれではない）。

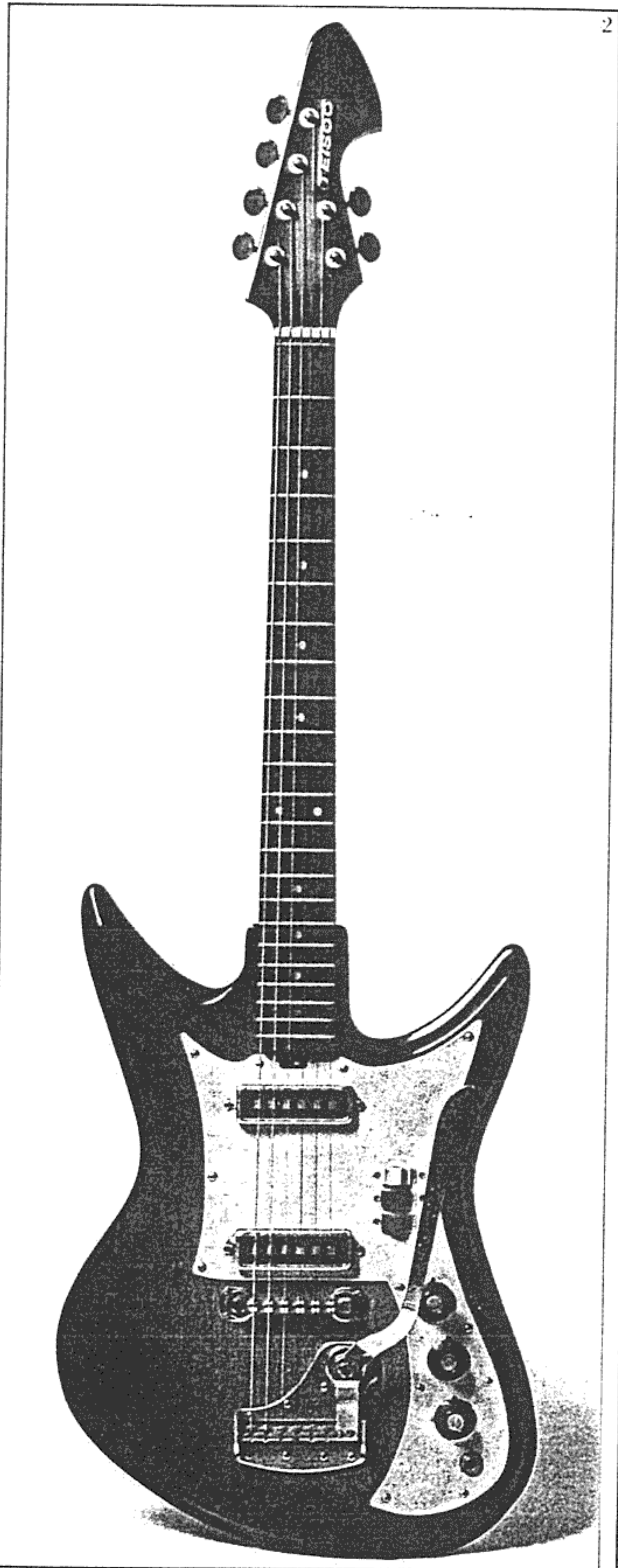
このギターは出力がステレオになっていて、コントロールは実に複雑である。1から5まで番号のつけられたスライド・スイッチで各ピックアップの組み合わせを決定する。そのスイッチ群からちょっと離れたところに位置するのはステレオ/モノの切り換えスイッチ。ふたつのツマミはボリュームとトーン。ジャックはふたつあり、シールド1本で普通に使用したい時はジャック1に差し込む。この時はステレオ/モノ・スイッチをモノ側にしておく。ステレオ出力にしたい時はジャック2にもシールドを差し込み、スイッチをステレオ側にする。この時、ジャック1からは4、5、6弦が出力され、ジャック2からは1、2、3弦が出力される（この時スイッチをモノ側にすると音が出なくなる）。コントロールに関してははっきりわかるのはここまで。実は肝心のピックアップの組み合わせは、よくわからないのである。写真のギターでいろいろ試してみても、スイッチ3ではリア・ピックアップのみ、スイッチ4ではフロント+リア、スイッチ1、2、5ではすべてのピックアップがONになるということはわかった。ただしそれぞれ微妙に音色が違ってくる。強いて音色の違いを言うならば、1ではリア寄りの音、2ではフェイズ・アウトっぽいサウンド、5ではフロント寄りの音がするといったところか。このギターに関しては、今回お話を伺った元テスコの方々もよく覚えていないという。何しろ25年前のギターであるし、コントロール系統が完全ではないことも考えられるので、詳しいことがわかる人はぜひ編集部まで知らせてほしい。

スペクトラム 5 の開発コンセプトは色彩豊かな音を出すということであった。スペクトラムは分光とか残像といった意味で、5は5色に塗り分けられたPU切り換えスイッチを示している。つまり音を光の色に転換してスペクトラム 5 という名前がつけられたわけだ。

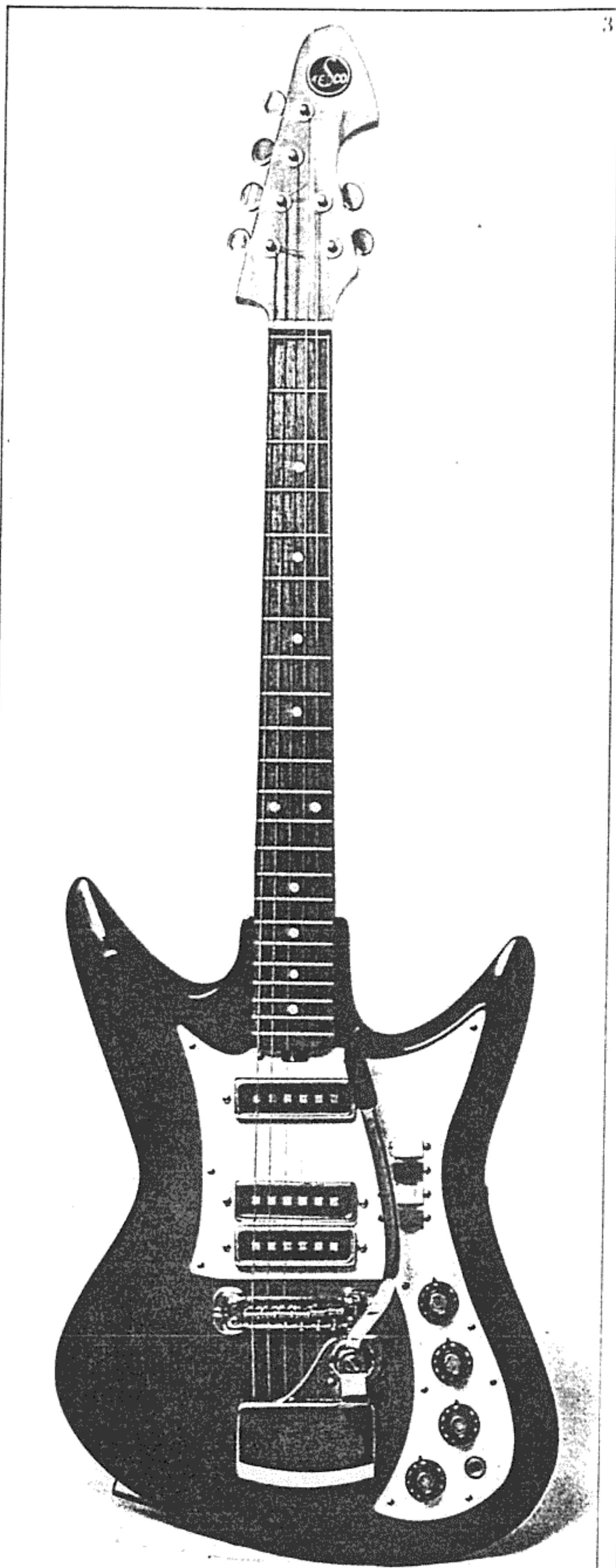
トレモロは、テスコ初の板バネ式。フレットは22（指板のみ延長された形で+1フレットとなっている）。0フレット付き。写真のギターは Teisco Del Rey という輸出ブランドのモデル。日本での発売価格は¥36,000。ソリッドではテスコで一番高いギターであった。

テスコ・ソリッド・ギターの歴史は昭和29年に始まる。テスコは創業以来ハワイアン・ギターや、ピックアップ・ギターにマイクを取り付けたギターを中心に製作していたが、ギブソン・レス・ポール・ゴールド・トップとの出会いにより、ソリッドのエレキ・ギターにも力を注ぐようになった。ここでは、テスコ・ソリッドの傑作の数々をお見せしよう。

K-2L



K-3L



これら2台のギターは、デイヴィッド・リンドレー・ファンにはお馴染みの“K”シリーズだ。左のK-2Lはピックアップがふたつ、K-3Lはピックアップが3つのモデル。Lは“Lever”,つまりトレモロ・アーム付きを表す。リンドレーのギターはピックアップが4つのK-4Lである。Kというモデル名は、ホーンのトンガリ方とボディの感じがアルファベットのKに似ていることに由来している。発表は昭和41年だが、スペクトラム5よりも先。テスコには昭和39年にひとり、40年にひとり、新しいギター・デザイナーが入社しており、Kシリーズとスペクトラム5は、先に入社したデザイナーの作品であった。両モデルに見られるトガったホーンはそれまでのテスコ・ギターには見られ

ない特徴である。また、スイッチ類がそれまでのプッシュ・ボタン式スイッチ（後述、P84を参照）からスライド・スイッチに変わった。

K-2Lのコントロールは、2ピックアップON/OFFスイッチ、リズム／ソロ切り換えスイッチ（後述、P84を参照）、2ボリューム、1トーン。K-3Lは、3ピックアップON/OFFスイッチ、リズム／ソロ切り換えスイッチ、3ボリューム、1トーンとなっている。ちなみにK-4Lは、4ピックアップ切り換えスイッチに1ボリューム、1トーンとなっていて、リズム／ソロ切り換えスイッチはホーンの付け根あたりに付けられていた（P14のリンドレーのギターを参照）。

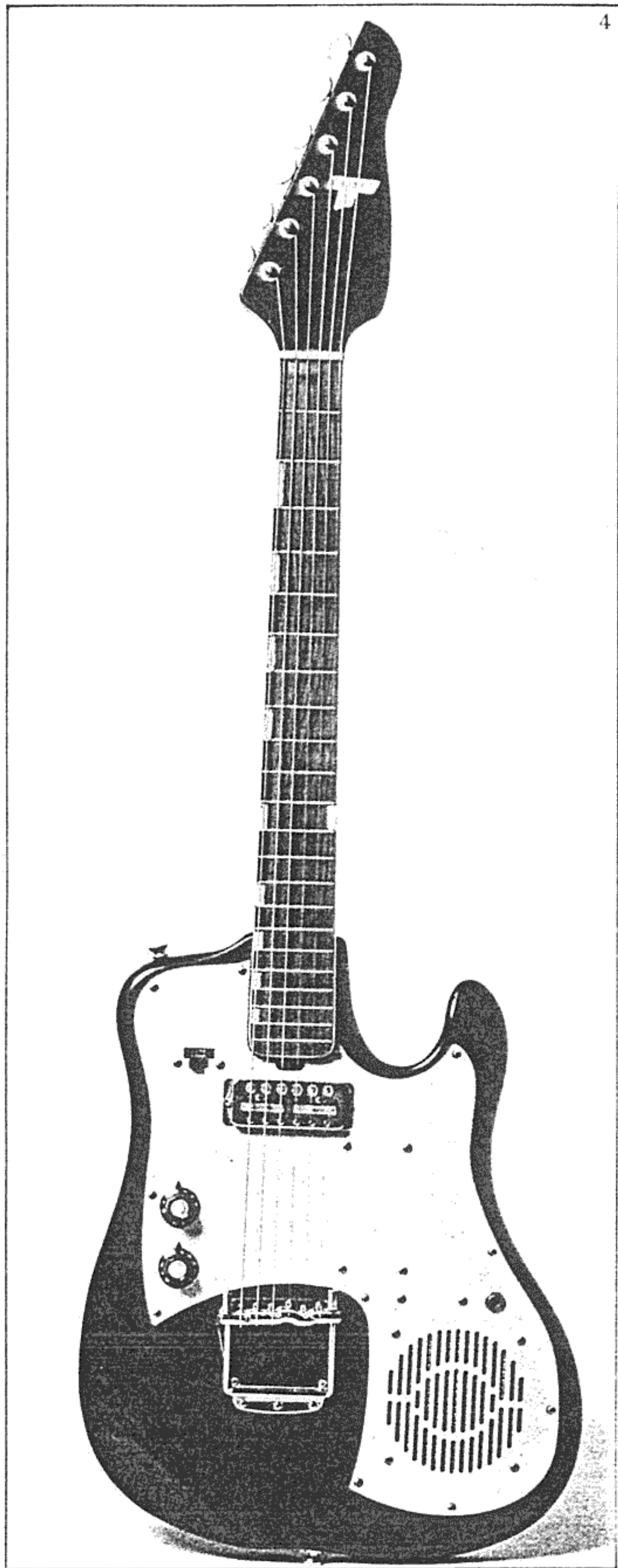
ピックガードはアルミニウムで、これが独特のサウ

ンドを生むのにひと役買っているようだ。リンドレーはそれについて次のようにコメントしている。

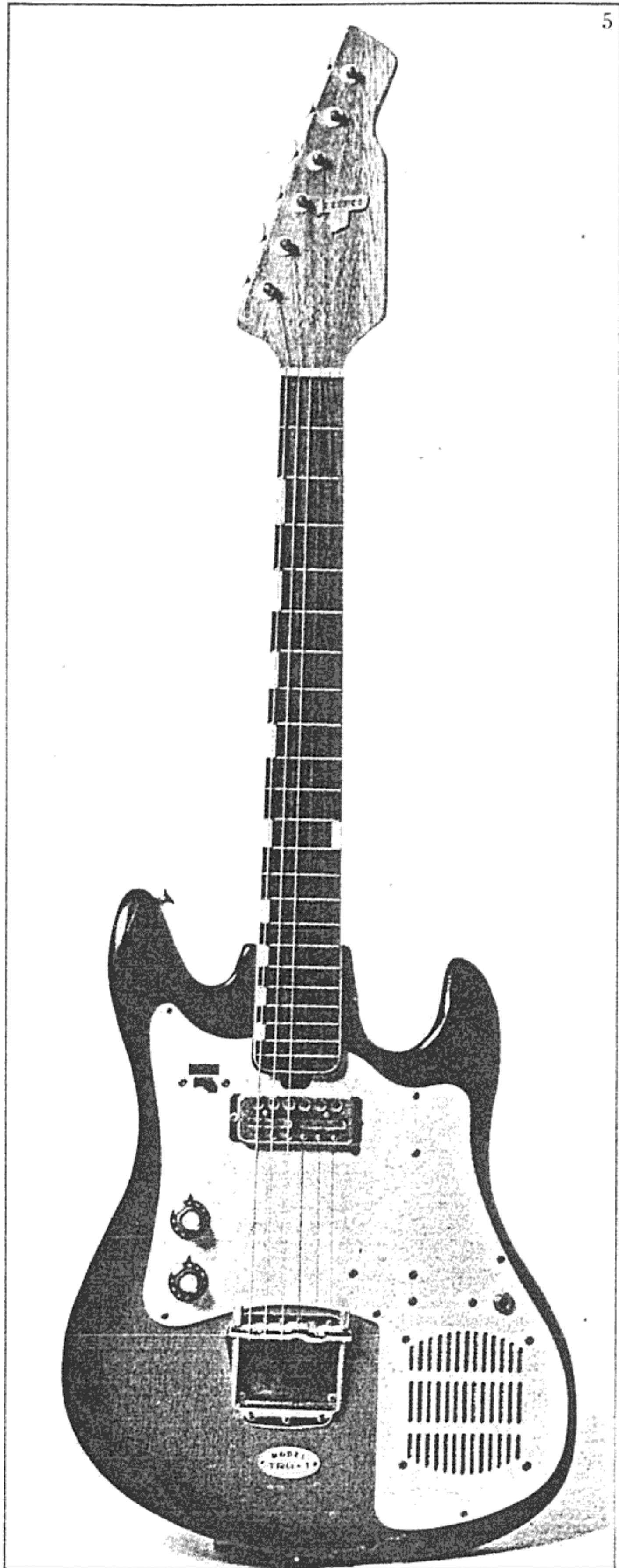
「ボディのサウンドがアルミニウムのピックガードを通るので、ピックアップが拾うんだ。ピックガードにスプリングを使ってピックアップを取り付けてあるんでね。セミ・リバーブ・エフェクトが得られるんだ。コンビネーションが良くてそうだったんだろうね。ネックも関係あると思うけどね」。

写真のギターは左はロゴから判断して（ロゴについてはP84を参照）、昭和42年以降のもの。右は、41年のものと思われる。ヘッドは新4:2型（P82を参照）、0フレット付きで、価格はK-2Lが¥16,000、K-3Lは¥17,500、K-4Lが¥19,800であった。

TRG-1



TRG-1



これがテスコが誇る、トランジスタ・アンプとスピーカー内蔵のギター、TRG-1だ。なんて愛くるしいルックスノ（これが可愛いと思うなら君はもうテスコファンだ）。左はシングル・カッタウェイ・バージョン、右はダブル・カッタウェイ・バージョン。両者では、ヘッドとスピーカーの形も違う。関係者の話を突き合わせると、先にシングル・カッタウェイの方が作られたが、次第にモデル・チェンジされてダブル・カッタウェイに落ち着いたらしい。発売は昭和39年5月20日で、カタログにはダブル・カッタウェイ・モデルしか記載されていない。両者が同時に発売されたのか、

はたまたシングル・モデルの方が先に発売されていたのか残念ながらはっきりしない。

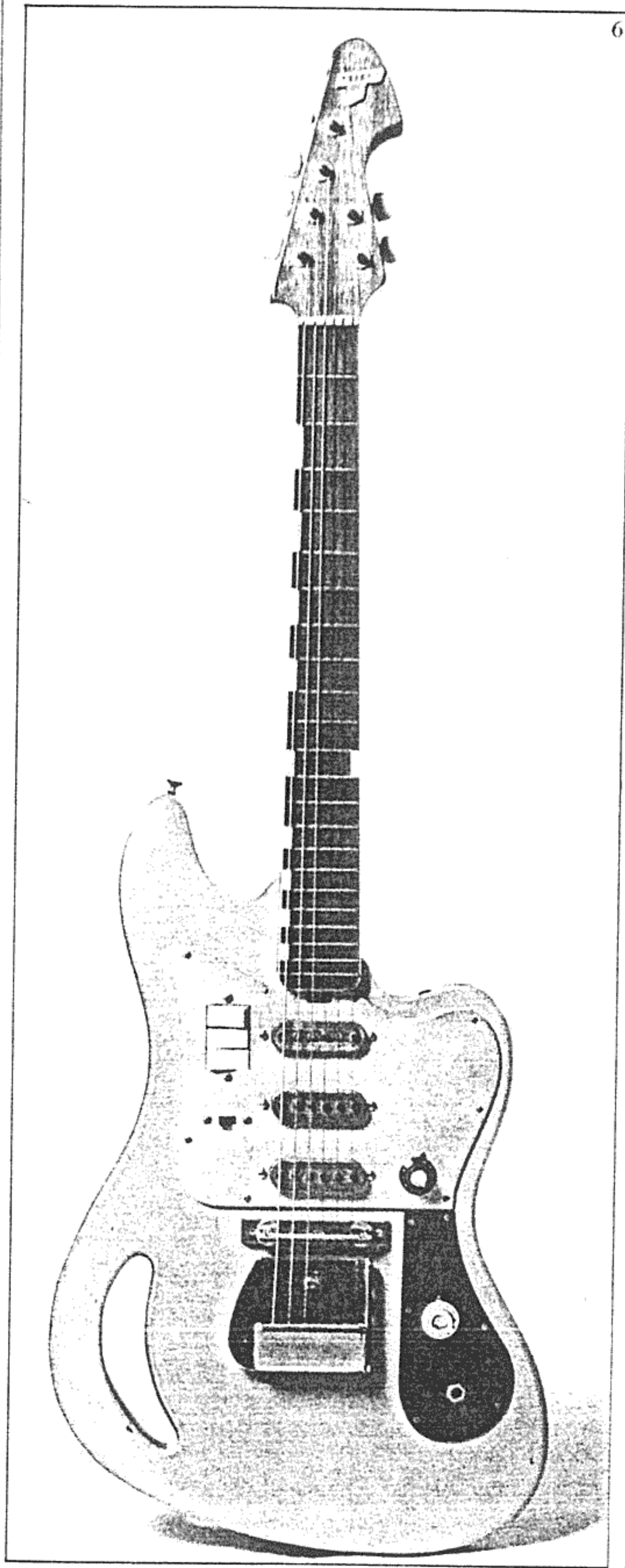
このギターの開発目的は、“野山や海辺にハイキングに行ったりする時、アンプがなくても楽しめるように”ということであった（思いつきがすぐ実現されてしまう良さ時代だったのネ）。組み込まれたトランジスタは4石で、トランジスタ用乾電池006P-9Vを2個使用。カタログ上では、連続使用で20時間、断続使用で30時間持続することになっている（実際はもっと消耗が激しいようだ）。出力は0.5W。音量は、部屋で弾くには十分といった程度。しかし、あまり売れなかったそう

である。

ピックアップのやや左上にあるのがスピーカーのON/OFFスイッチ。その下にボリュームとトーンがある。スイッチをONにすると、内蔵スピーカーから音が出る。シールドを差し込めばアウトプットから音が出るが、スイッチをONにしておくと内蔵スピーカーからも音が出る。この時、アウトプットとスピーカーの音量、音質は同時にコントロールされる。

昭和40年頃には、TRG-1のヘッドはお馴染みの新4:2型に変更され、スピーカーもさらに違う形が登場。価格は¥17,000であった。

TG-64

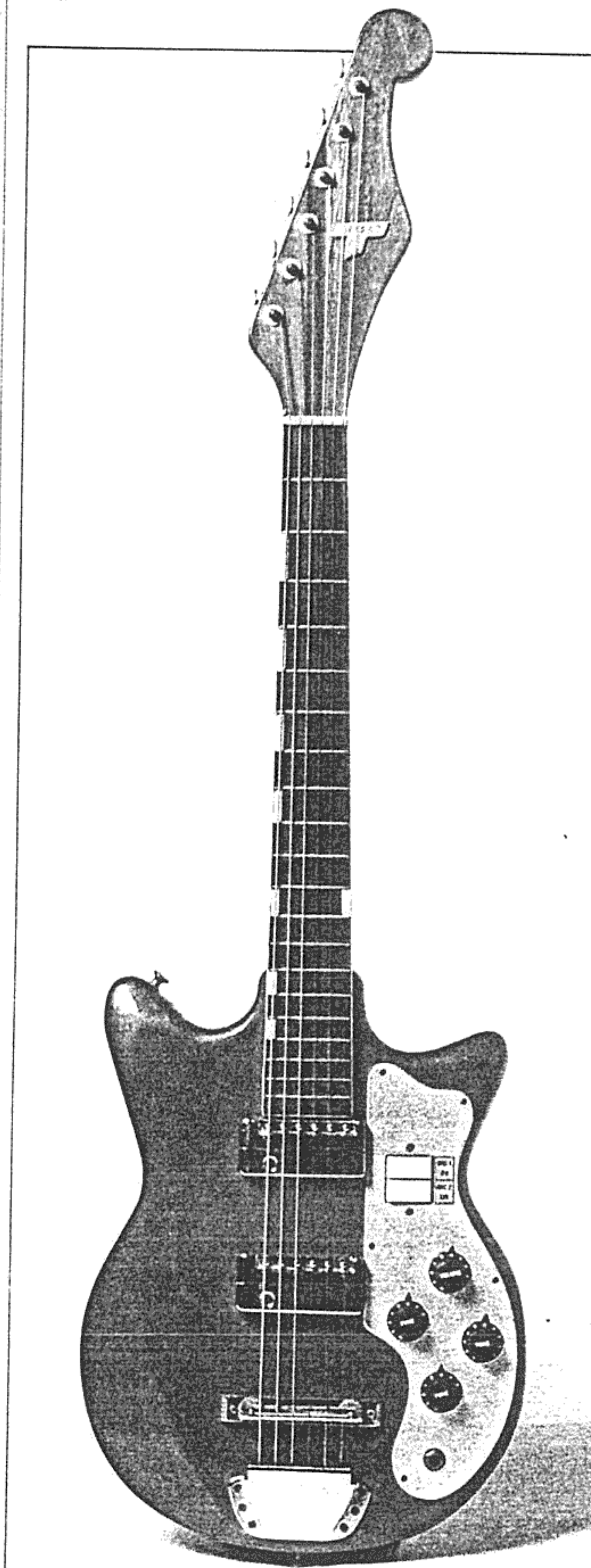


テスコの最もポピュラーなエレキがこのモデル、TG-64だろう。発表はTR G-1と同じ昭和39年5月20日。目を惹くのはなんと言っても、ボディの穴だ。これはアイバニースのスティヴ・ヴァイ・モデルで言うところのモンキー・グリップである。この穴は実はTG-64よりも以前のT-60（1960年発表）というモデルですでお目見えしている。アイバニースで一躍有名になった感があるが、実は31年も前のギターに空いていたとは驚きだ。なぜこれが空けられたかにはふたつのわけがあった。ひとつには、このギターはやや重かったので、穴を空けて少しでもボディを軽くするため。さらにふたつ目は、ギターの位置をちょっと直す時にボディの下に手を回すよりはこの穴を使った方が便利だろうというわけ。もちろんギターを持つのに便利だろう。

このモデルは映画『エレキの若大将』（昭和40年）でタップリと拝むことができる。長寿庵の出前持ちタカシ（寺内タケシ）を始め、青大将（田中邦衛）、若大将のライバル・バンド、ザ・シャークスの電気ウナギの赤井（ジェリー藤尾）、若大将に首ったけの女の子バンド、アイビー・シスターズのリード・ギターがこれを使っている。

コントロールは1ボリューム、1トーン、3つのピックアップのON/OFFスイッチ、リズム・ソロ・スイッチとなっている。4:2のペグ配置、線状ポジション・マーク、アルミのピックガードなど、まさにテスコ・エレキの代名詞であった。価格は¥22,000。

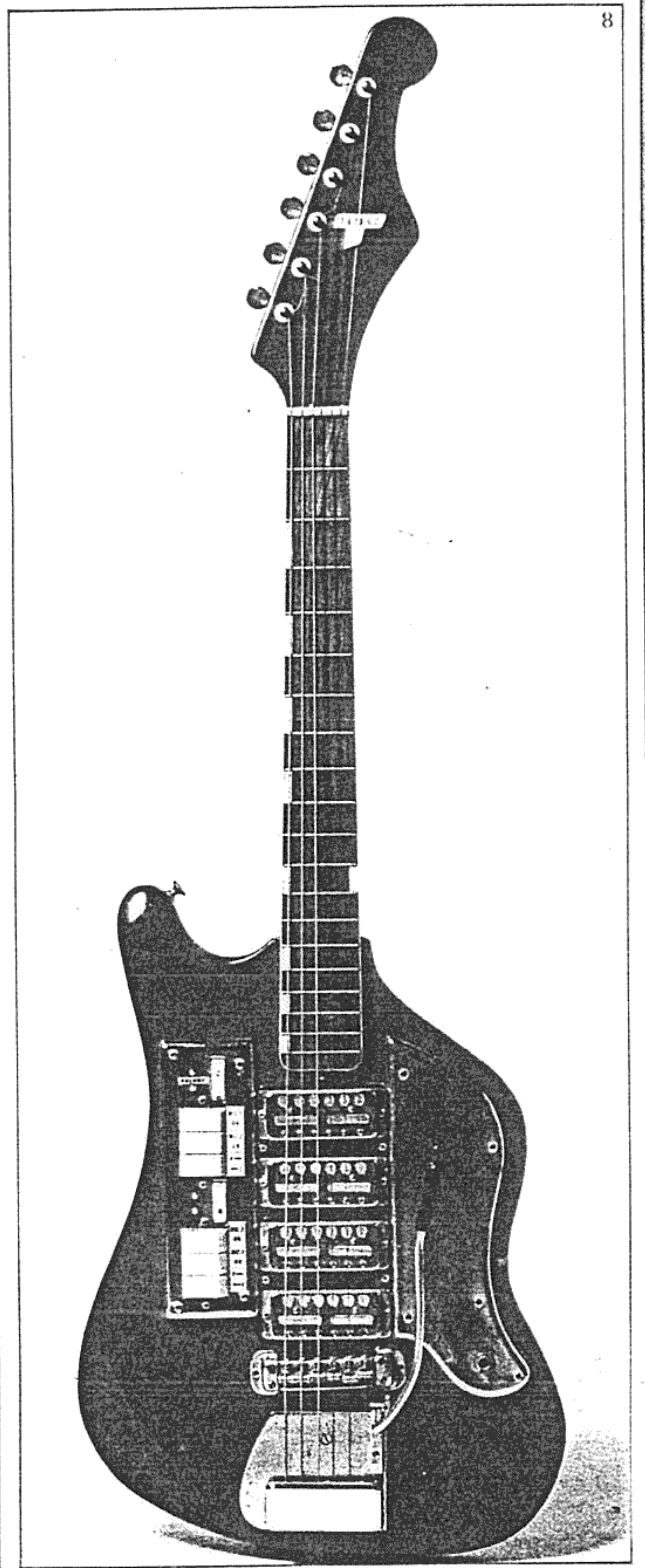
MJ-2



これはMJシリーズのうちのMJ-2というモデル。このモデルは昭和37年のカタログには載っていない、39年のカタログには載っている。今回嬉しいことに39年のカタログを入手できなかったためはっきりとは言えないが、39年のカタログには既発モデルとして記載されていることから、発売は38年と思われる。この時にMJ-1（これはピックアップがふたつで、1ボリューム、1トーン）も発売されている。タツノオトシゴ・ヘッド（編集部命名）、Tの字ロゴ、カバード・タイプのピックアップ、そしてノン・トレモロが初期のMJの仕様だ。コントロールは2ピックアップON/OFFスイッチ、2ボリューム、2トーンとなっている（写真のギターが3トーンの1ボリュームなのは、足りないパーツを間に合わせて付けてあったため。しかもこれはオリジナルではありません）。40年には、新たにトレモロ付きのMJ-2Lも発売になる。この頃から、MJシリーズはピックアップが変更され、ヘッドも新4:2型ヘッドになった。そして、41年になるとピックアップが3つでトレモロ付きのMJ-3Lもラインに加わる。『エレキの若大将』で加山雄三が弾いているのはMJ-2Lである。MJのJはJr.の意で、いわゆる普及品の安いモデルに付けられた。

価格は¥9,050。MJ-1は¥8,000、MJ-2Lは¥12,000、MJ-3Lは¥13,500となっていた。

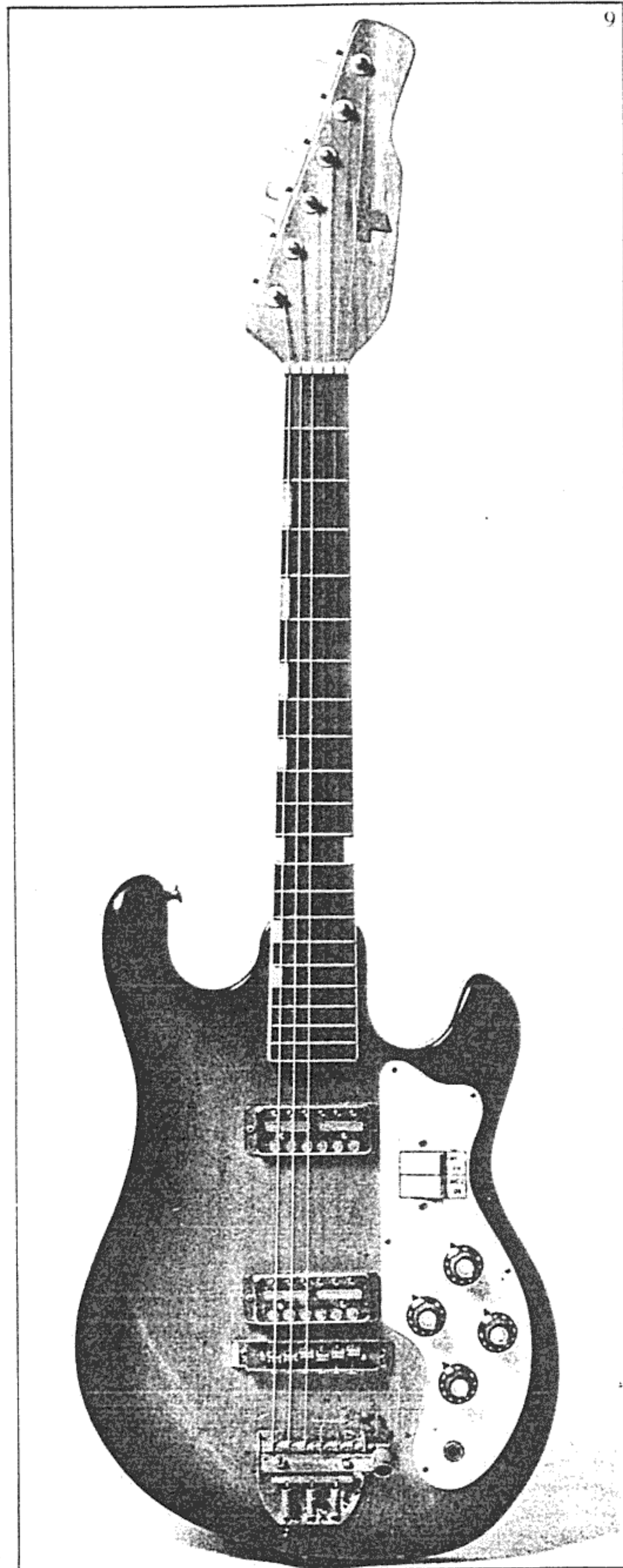
SS-4L



これもおそらく発売は昭和38年。SSシリーズのうちのSS-4Lというモデルだ。このゴテゴテした風貌はまさに圧巻というか、“びっくりしたなあもう”という感じである。ヘッドはツツノオシゴ型、ギター全体の感じもなんとなくツツノオシゴみたいに思える（象という気もするが）。SSシリーズには他に、SS-2L、SS-3Lがあった。

ピックアップはTRG-1と同じタイプ。これはハムバックングではなく、シングルコイルである。コントロールは、4ピックアップON/OFFスイッチ、2リズム・ソロ切り換えスイッチ、1ボリューム、1トーンとなっている。ピックガードは5ミリ以上もあるうかという金属製。線状ポジション・マーク。価格は¥18,000。SS-2Lは¥16,000、SS-3Lは¥17,000であった。

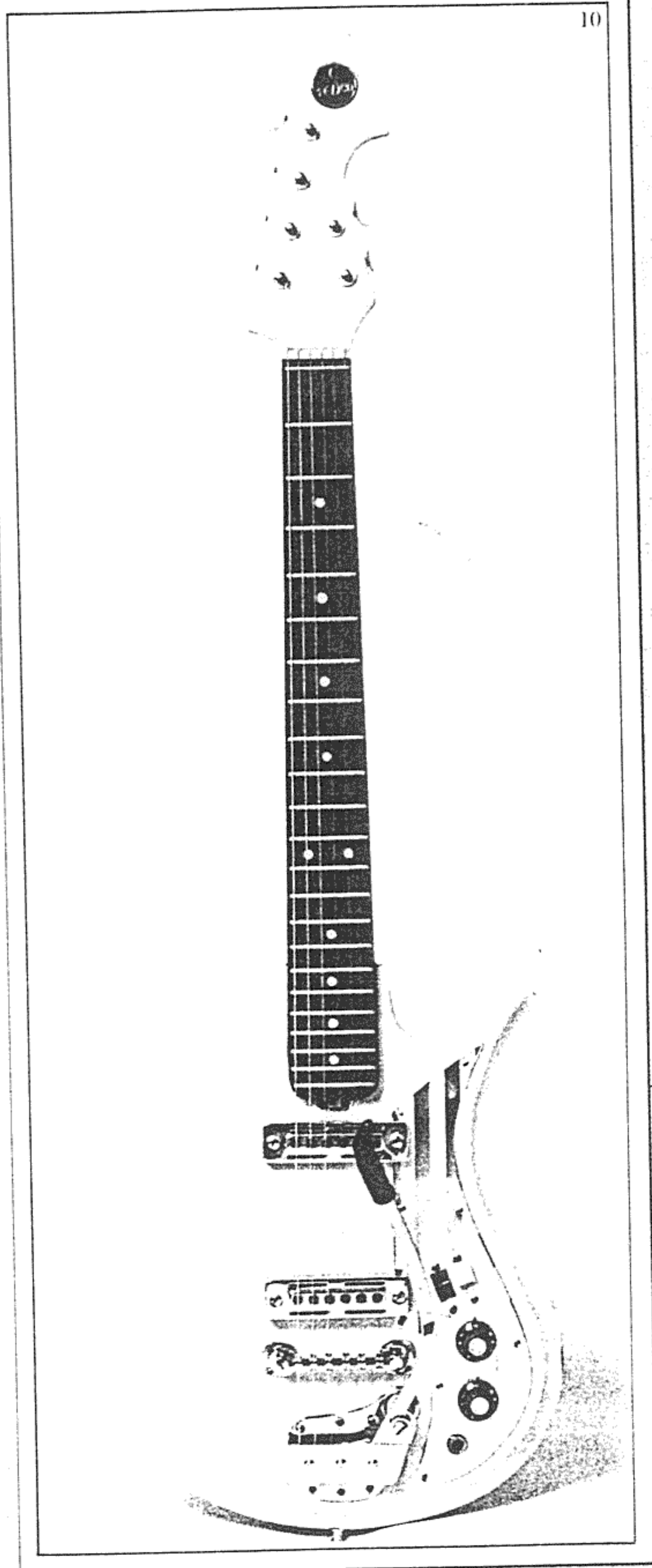
WG-2L



これはWGシリーズのうちのWG-2Lというモデル（写真のギターではトレモロが紛失している）。MJ、SSと同時期に発売された。コントロールは、2ピックアップ切り換えスイッチに、2ボリューム、2トーンと、シンプル。ピックガード上の構成はMJ-2とまったく同じである。ピックアップはTRG-1と同じ。同時にWG-3Lも発売されている。MJと同様、WGも昭和40年頃にはピックアップが変更され、ヘッドは新4:2型になる。そして新たにWG-4Lがラインに加わった。『エレキの若大将』では、ザ・シャークス、アイビー・シスターズ共にサイド・ギターがWG-3Lを使っていた。

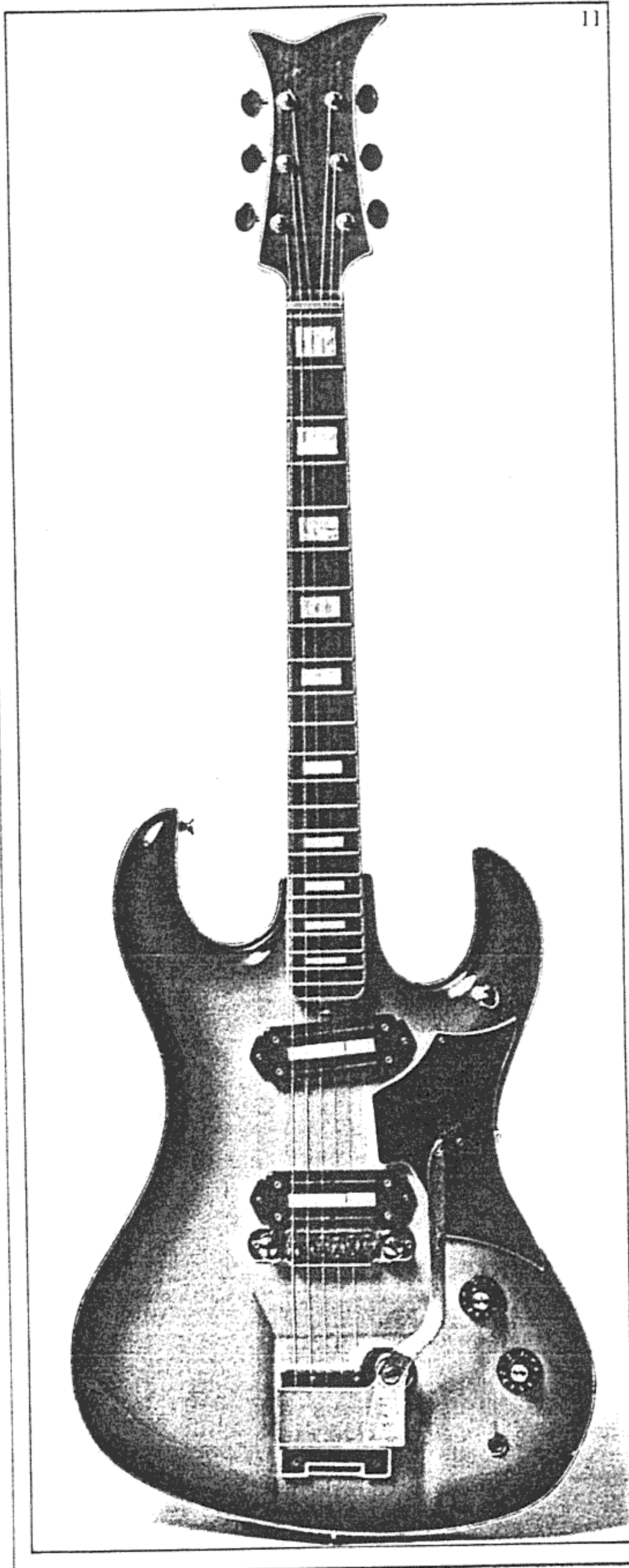
ポジション・マークは例のテスコ・タイプ。価格は¥15,000。WG-3Lは¥16,000。WG-4Lは¥18,000であった。

SM-2L



まるでチューリップのようなシェイプのSM-2L。なんとまあ可愛い、という感想をお持ちの方もいるのでは？（実物は涙モノの可愛さだ！）。さらにこのギターはやたら軽いのだ。これはテスコ新デザイナーのもうひとりの作品だという。発売は昭和41年でKシリーズと同時期。ホーンの感じとスライド・スイッチがKやスペクトラムと共通している。ピックガードはアルミ。コントロールは2ピックアップON/OFFスイッチ、1ボリューム、1トーン。0フレット付き。価格は¥9,080。ちなみにSMと名のつくギターはこれだけである。

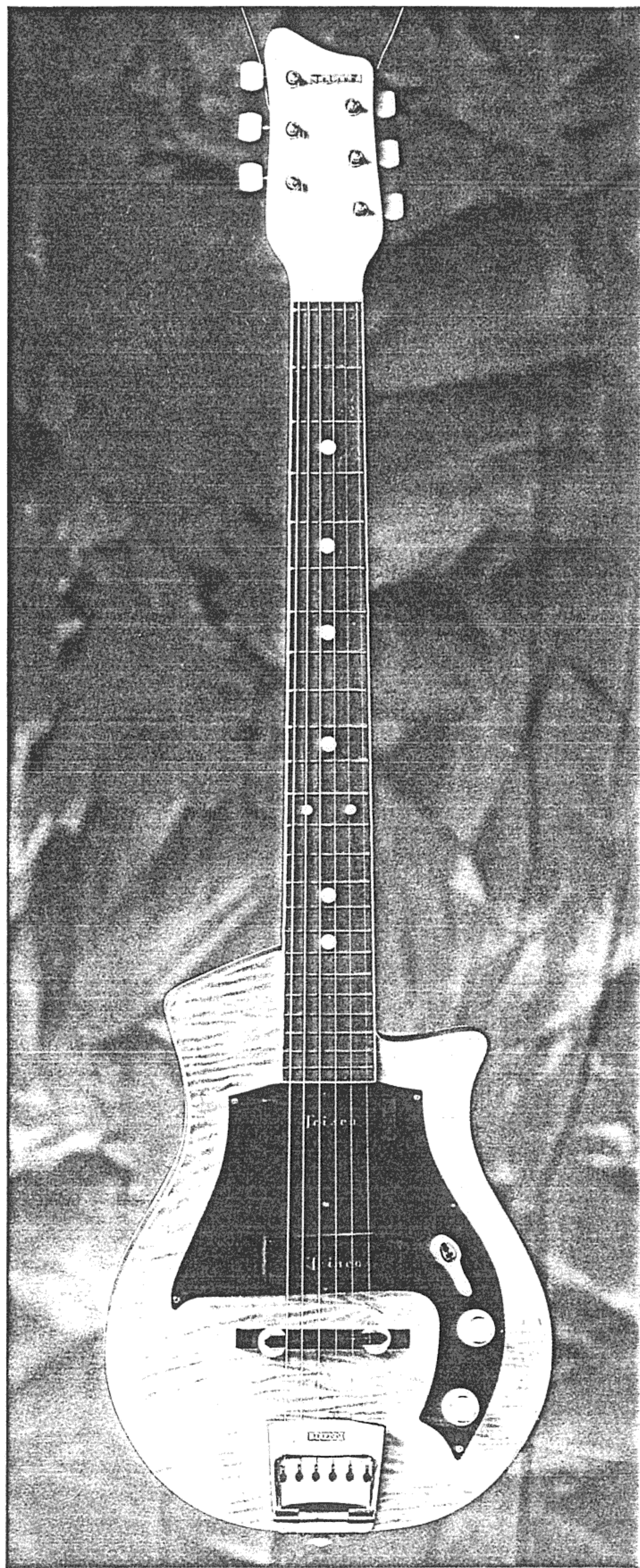
DG-67



テスコは昭和41年12月に河合楽器に吸収合併され、新たにテスコ商事として再出発する（詳しくはP23以降を参照）。その一番最初の新製品がこのDG-67である。発売当時はどういわけかモデル名がDG-64となっていた（楽器商報昭和42年5月号、6月号にその広告が出ており、7月号からはDG-67と名前が変更される）。

コントロールは1ボリューム、1トーン。ピックアップ切り換えスイッチはトグル・タイプのスイッチになっている。ピックアップはバー・ポール・ピースを採用していて、1、2弦でひとブロック、3、4、5、6弦でひとブロックのスプリット・タイプ。トレモロを低くマウントするためにボディに段を落としているところが面白い。0フレット付き。価格は¥36,000。

J-5



これはJ-5というテスコ・ソリッド・ギターの初期のモデルだ。おそらく製作されたのは、昭和34年頃であろう。テスコ初のソリッドはTG-54 (1954年/昭和29年) という、レス・ポールのコピー・モデルであり、その後、Jシリーズというジュニア向けの低価格ギターが作られた。これはそのシリーズのひとつだ。まだレス・ポールの名残りをとどめているのがわかると思う。P77に昭和37年のカタログを掲載してあるが、その中にもJ-5の姿が見られる。実はこれはそのJ-5の原型となったギターなのである。

ピックアップはふたつで、テスコのロゴが彫られている。コントロールはピックアップ切り換えのロータリー・スイッチ、1ボリューム、1トーン。0フレット付き。美しいトラ目に目を見張ってしまうが、これはメイプル・ベニヤを貼りつけたものであるということだ。面白いのはよく見るとポジション・マークが、普通は9フレットのところを10フレットに付けられていることと、全部で23フレットになっていること。それにしても、これなど今出てもまったく通用するギターだと思うのだが…。デザインも色もいいし、なんと言っても可愛いでしょ。なお、これはアメリカの有名なギター・コレクター、テスコ・デル・レイ氏が所有しているものだ。

さて、ここまで超個性的なテスコのギターの数々をお目にかけてきたわけだが、どんな感想を持っただろうか？ 少なくともこれだけの個性あるギターが過去の日本に存在したことは驚きである。ひとまずここで、テスコの歴史に話を進めてみることにするが、テスコ・ギターのラインナップはまだまだ続くので、読み終わったらすぐにP69に目を移してちょ。あー、ワクワク…。



テスコの歴史

テスコと言えば、エレキ・ブームの短い期間にだけ存在していたメーカーだと思われがちだが、ところがそうではない。

スタートは戦後間もなくのことである。

それからハワイアンを作り、ピックギターを作り、ソリッド・ギターを作った。

そして今日の日本のギターの基礎を築いた。

ここではギター作りの中核であった元テスコ営業部長の橋本博義氏とソリッド・ギターの関係を中心にテスコの歴史を追ってみることにしよう。

創業期

テスコの歴史を語るには、戦争以前、昭和10年代にまで時をさかのぼらねばならない。この頃は、音楽と言えばジャズかハワイアンで、14年頃にはハワイアンがブームになっていた。すでに昭和6年頃には、リッケンバックが世界初のスティール・ギターを市場に出しており、電気ギターのサウンドが徐々に日本にも上陸していた。そのサウンドは多くの若者たちを魅了し、自ら電気ギターをプレイする人の数を増やした。しかし、高価な外国産のスティール・ギターを手に入れるのは至難の技であった。そこで、彼らはスティール・ギターを自作することを考えた。テスコの創業メンバーである、橋本博義氏もそのひとりだ。

「俺は戦争前にスティール・ギターを弾いてたんだ。バッキー（旧片）さんとか、ディック・ミネやなんかのモア・ラブリー・クラブの人たちとね。あの人たちと仲良かったし。スティール・ギターを弾くために電気ギターを作ったわけね。ピックアップのコイルを自分で巻

いてね。磁石を買ってきてコイルを巻いて作って、それをステージで弾いて。銀座のダンス・ホールとかいろんなところで。最初は自分で弾くために作ったわけよ。で、戦争から帰ってきてからが簡易になった」。

この頃、松本三男氏（東京サウンドの創立者）、橋本氏や作曲家の故郷田中助氏とバンド活動をしていた金子充男氏も自作のピックアップを作っていた。松本氏は東京都豊島区の椎名町で木工業を営んでおり、橋本氏は自作のピックアップを乗せるボディをここで作ってもらうようになる。

「戦争前にね、僕は建具屋さんというか、木工屋さんで台を作ってもらったわけよ。それがグヤの親父さんなのよ。椎名町ってあるでしょ。あそこで戦争前に建具屋さんをやってたわけ。それでボディを…。木の形だけ作ってもらってね。それを家へ持って帰ってきて、マグネットにコイルを巻いてスティール・ギターを作って。で、僕が弾いてたわけなんだ」。

しかし、日本軍は昭和16年12月8日、ハワイの真珠湾を奇襲攻撃し、太平洋戦争が勃発。やがて戦局は激しくなり、日本は次第に泥沼の時代へと突入していった。英

語は敵性語として禁止され、ハワイアンやジャズは敵性音楽として弾圧された。この時、橋本氏もやむなく出征を強いられ、戦場に赴くこととなった。

昭和20年8月15日、戦争は日本軍の無条件降伏という形で終結。連合軍司令官マッカーサー元帥を筆頭とするアメリカ軍の日本進駐が始まった。それと同時に、それまで敵のように言われていたハワイアン、ジャズが復活。また、ブギと呼ばれる陽気な音楽が大流行し、巷には活気ある音楽が溢れた。音楽の流行と共に日本は次第に明るさを取り戻していったのである。

のちのテスコ社長、松田章龍氏は松本富三氏（のちのテスコ常務）などと共に戦時中は東京都新宿区大久保の陸軍技術研究所に所属していたが、終戦後、この研究所のメンバーが設立した富士音響社に加わる。この会社はマイクロフォンや拡声装置を作っており、ふたりは技術を担当していた。ここに戦後のいつ頃か、前述の金子氏が訪ねていったところからテスコの歴史がスタートする。その時のことを橋本氏は次のように語る。

「松田さんは戦争が終わってから、ちょっと有名な拡声装置だとかをやる会社があって、その技術屋さんでい

たわけ。そこへ僕と仲のいい友達の金子がアンプを作ってもらいに行っただ。そこから始まっているわけよ。それで友達に頼まれて電気ギターを作ったりしているうちに、どうだひとつ会社を起こしてやらないかっていうんで古川橋で始めたところへ僕が戦争から帰ってきた。その時に松田さんは富士音響から2、3人抜いて独立して、テスコの前身のアライ音波ってのを作ったの」。

そのようにいささつて松田氏は松本氏他を連れて富士音響を出ると、金子氏と東京都港区古川橋にアライ音波研究所を設立した。それが昭和23年のことだ。松田氏夫人の実家は古川橋で塗装業を営んでおり、アライ音波はその1階を工場にしていた。そして、この頃はピックアップギターにマイクを取り付けたギター（いわゆる、セミアコやフルアコの電気ギター）が流行していたため、ギター・マイクの開発に力を入れるようになる。さらに、マイクロフォン、アンプ、ハワイアン・ギターなどを製作していた。「Teisco」というブランド名はこの頃に金子氏によってつけられたものだ。

この年、金子氏は戦地より無事復員したばかりの橋本氏に誘いの声をかけた。

「松田さんには経営才覚が少しあるから、会社をやろうというんでやったところへ僕が戦争から帰ってきたわけだ(笑)。ところが、金子は「俺はやるのか嫌だからお前やってくれ」って言うんで、俺がやるようになったんだね」。

こうして橋本氏が参加するとすぐに株式会社アライ音波研究所が設立された。この時に旧工場を出て、近くのボクシング・ジムを買い取りそこを新工場兼事務所にしている。戦前に自分でハワイアン・ギターやピックアップを作った経験を持ち、楽器に精通していた橋本氏の参加によってアライ音波は本格的にハワイアン・ギターの製作にのり出すことになった。

「変な話だけど、テスコには楽器がわかる人が誰もいなかったんだ。(中略)行ったらみんな楽器なんか知らないんだもん。音を出すことはわかるわけ。電気のこととはわかるんだ。俺は電気のこととはわからない(笑)。でも、フレットの寸法の割り出しから、ネックの幅の計算や反り具合の調整までずっとやってきたからね。弾けるっていうのはひとりもいなかったんだ。全然触ったことのない人ばかりだったから。聴くのは好きだったんだらうけど」。

アライ音波は昭和23年から25年頃まではハワイアン・ギターだけを作っていたという（もちろんアンプやギター・マイクは作っていた）。ハワイアンを作るにあたって、橋本氏は最初、ボディの製作を戦前からつきあいである松木氏に依頼した。

「戦争後にテスコで始めた頃には、スティール・ギターのボディだけは松木のところで作ってもらって。あそこじゃ親父さんが肩へかついじゃあボディを持ってきたわけ。そのうちにだんだん売れるようになってきたもんで、松木は「ボディだけ作ってたんじゃ面白くない」って(笑)、「電気ギターを作る」ってんで始めたんだよ。古いつきあいなんだ」。

その後、橋本氏は四の橋（今で言う古川橋からバス停ひとつぐらゐの距離）の登坂木工というところにもボディ製作を依頼。こうしてアライ音波は2箇所でもボディを作るようになったが、そのうちに完全に登坂木工に移ってしまったという。

「四の橋に登坂さんというちょっと鯨背な親父の建具屋さんがあって、これが作ったんだ」。

そうこうしているうちに、松木氏はやはり四の橋に工場を作り、グヤトーン・ブランドのギターを製作し始めた。ここにグヤトーン・ブランドが誕生し、日本のエレキ・ギターの本格的な幕開けが始まったのだ。

戦後、ジャズやハワイアンなどの洋楽が大流行したとは言っても、エレキ・ギターは当時の人たちにとって、ほとんど未知の楽器であった。テスコやグヤトーンはそ

んな状況の中からハワイアン・ギターを作り始めたわけである。最初は自分でプレイするつもりで作り始めたギターがようやく売れるようになってきた。洋楽はそれまでも増してポピュラーになり、次第にギターを手にする人も増えた。そして、アライ音波はハワイアンばかりでなく、ジャズをターゲットにしたギターも製作することとなる。

拡張期

ハワイアン・ギターもひと段落した昭和25～26年頃、アライ音波は電気ピックギターの製作にも乗り出す。この頃、名古屋の伸光商事はナルダンというブランドで優秀なピックギターを作っていたが、アライ音波はここと手を組んだ。ナルダンのボディに自社製のピックアップを搭載して完成品として発売したのだ。この当時はちょうど朝鮮戦争が勃発した時期であり、この電気ギターが輸出用に飛ぶように売れたという。

「日本楽器（今のヤマハ）やなんかに行っていろんなことを調べてるうちに、あのピックギターがいろいろっていうことで白羽の矢が立って、それで岩田さん（伸光商事社長の岩田初由氏）とやるようになったんだ。ナルダンとはずいぶんやったね」。

「銀座にオリエント商事ってのがあってね。ここが朝鮮の米軍向けの輸出にギターを買い始めたわけよ。それで、ナルダンのギターにピックアップを付けたヤツ、それからいろんなギターを作り始めたわけ。ずいぶんオリエント商事を通して売ったね。あの頃朝鮮の米軍がずいぶん買ったんだよ。買いたいけど、ギターなんて売ってないわけだよ。それで日本で作ったのを持っていくと売れたんだよ。ちょっとブームでね。あそこで本当に商売になった。日本だけだったならまだ商売にならなかった」。

「何しろ朝鮮戦争でちっちゃい企業から少し大きくなりかかるきっかけになったんだ。日本人はまだ、「へっ！エレキなんてのはなんですか？」っていう時代だったからね。俺が全国を行脚して回った時代なんだ(笑)。エレキとはこういうものだって、アンプを下げて雪の中をずーっと回ったんだから(笑)。だから、朝鮮戦争によってエレキなるものが世の中に出るきっかけになったんだね。それからまた長かったね。ベンチャーズなんてのはずーっと最後の最後、終わりの頃だよ」。

ハワイアン・ギター、電気ピックギターと、アライ音波のラインナップは充実し、テスコ・ブランドのギターは次第に一般にも認知されていった。そして、橋本氏はその後のテスコの運命を決定づける大きな出会いを経験することになる。それが昭和28年頃のことだ。当時、荒井昇というギタリストが活躍しており、アメリカからギブソン・レス・ポール・ゴールド・トップを輸入して使い始めていた。橋本氏はそれを見て、ひと目で心を奪われてしまったという。そしてそのレス・ポールを借りると徹底的に研究を始めた。それから時を経た昭和29年のいつ頃か、アライ音波初のソリッド・エレキ・ギター、TG-54が誕生したのである。

「あの頃、エレキ・ギターでは彼（荒井昇）がナンバーワンだったんだ。それでギブソンのレス・ポールは日本にひとつしかなかったんだ。見た時からいいなあと思ってね。それを借りて、工場へ来て弾いてみてくれたけど、触りはいいし。それが確かネックが3ブレイだったと思った。それで、これでなけりやだめだと思ったのよ。荒井さんとは俺が親しかったから、借りてきたわけだ。ゴールドで。それを見て、こういうヤツを作ろうということになったわけだね」。

そうしてできたTG-54はギブソン・レス・ポールによく似たモデルであった。ここでP23の写真を見てほしい。車から体を乗り出している人物が持っているのがそれである。これが記念すべきテスコ・ソリッドの第1号であった。このあと、アライ音波は昭和34年までにT-57

や、ジュニア向けの安い製品、J-1、J-2、J-3、J-4、J-5と言ったソリッド・ギターを続々と開発する。同じ写真の、一番左端の人物が持っているのがJ-4だ。この頃はモデル・チェンジがずいぶんとくり返され、モデル名はそのままにいろんなプロトタイプ（と言っても売り物）が作られたらしい。写真のJ-4やP10のJ-5もそんな中の1本であった。

ソリッド・ギターもラインナップに加わった頃、昭和29年か30年にアライ音波は社名を日本音波工業株式会社に変更している。

「古川橋にいる頃にアライ音波から日本音波に変えたんだ。初め社長が、楽器の会社なんか作ると税金が高つくから、研究所名義で作れば助かるだろうって言うんで始めたわけだ。それで俺も株式会社設立に加わって。俺が行ってから株式会社にしたんだから。そのころは資本金が19万5千円で会社が設立できたんだ(笑)。ところが、そのうち物品税っていうものがかかるっていうんだよね。それまでなかったんだ。楽器にも物品税がかかるっていうことになったんで、麻布の税務署に日参して、物品税ってものはこういうものだって説明受けてさ。だから研究所って名前をつけたってダメだと。売れば税金がかかるって言われて。そうこうしてるうちに日本音波工業にしたんだよね。最初はなるべく製造をするというようなことは控えめにしてね、研究所って名前にしたわけだよ」。

社名を変更して、ソリッド・ギターのラインナップもカタログにも載るようになった頃、昭和33年か34年に日本音波は東京都北区浮間に工場もろとも移転した。この頃はちょうど50年代の終わりに当たり、アメリカではロカビリーやロックン・ロールが大流行。エルヴィス・プレスリー、チャック・ベリー、カール・パーキンス、パディ・ホリー、リトル・リチャードなどが大活躍していた。日本では昭和33年1月に平尾正章がデビュー。その後、ミッキー・カーチス、山下敬二郎らと共にロカビリー・ブームを巻き起こした。アマチュアでもカントリーやロカビリーのバンドが急増し、米軍のキャンプ回りをするバンドやクラブで演奏するバンドも出てきたのである。世の中は次第にロック色の濃い音楽に目覚めていった。そしてエレキ・ギターの需要は確実に増え、来たるべきエレキ・ブーム時代の下地ができていったのだ。

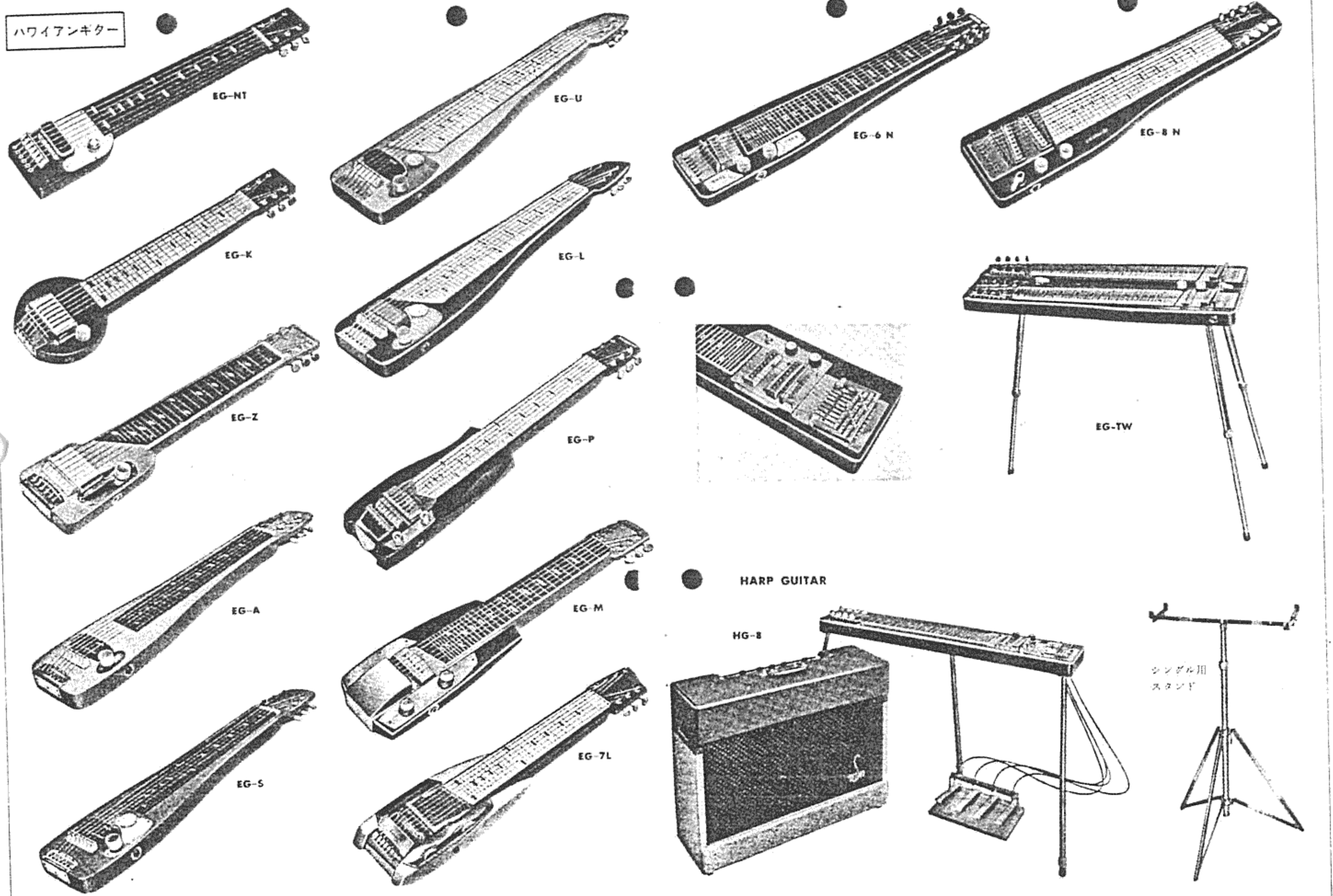
移転後の、昭和35年にはグリップ穴付きのT-60が作られる。この頃もハワイアンやソリッドのボディは登坂木工で作られていた。登坂木工で作られたボディは塗装業者に回され、それを浮間の工場に組み込むのである。この登坂木工というところはかなりの強者だったらしく、橋本氏は次のように回想する。

「登坂さんてのは建具屋さんで、3、4人大工さんがそ

前ページの写真説明

これはアライ音波時代に技術を担当していた足田豊氏（現啓陽社長）に提供していただいた、非常に貴重な写真だ。古川橋の本社前で、フィアット500の回りにテスコの面々がギターを持って集合している。右端で手を上げているのが橋本氏。その隣で車に座っているのが松本氏。足田氏は、車の向こう側の一番左でハワイアンを抱えている。アライ音波研究所の看板がかかっているところが事務所で、右のテスコ・ロゴがペイントされたところが、ボクシング・ジムを改装した工場だ。ピックアップが2台写っているが、両方ともナルダンの製品である。手前のピックアップはP22のJ-5と同じように10フレットにポジション・マークがある。ハワイアンやアンプもいくつか写っている。フィアットは橋本氏のものだそうだ。「ローマの休日」にグレゴリー・ペックが乗って出てくるでしょ。あれの1年前のヤツなんだ。会社にはあんな車に乗るような奴はひとりもいなくてね。まあモテたよ、その頃は(笑)。

ハワイアンギター



日本音波時代のハワイアン・ギター。昭和37年のカタログより。

ここに作ってね。みんな昔のスタイルで、座ってカンナかけるような大工さんで。だから手の込んだ精密なことやってくれるわけよ。そこもしばらくして工場を作ったりしてね。ソリッドはそこだけだね。やっぱり職人気質だからきれいなものを作るわけよ。

「終わり頃にはセミアコも作らせたのよ。セミアコぐらい作れるだろうっていうんで、ハッパをかけたわけ(笑)。職人気質だからね。やるんだよ。大量に作る場合でも、登坂さんに作らせて、この通りに作れ!と。そういうスタイルだった。でもとても大量にはできないからテスコ弦楽器ができる前は富士弦で…。それが大量に作り始めた最初の頃だろうね(笑)。

ここで気になる名前がふたつ出てきた。テスコ弦楽器と富士弦である。テスコ弦楽器はあと回しにして、まずは富士弦と日本音波との関連を追ってみよう。富士弦とはグレコやハートフィールドでお馴染みのフジゲン株式会社のことだ。海外でも国内でも次第にエレキが売れるようになってきた昭和35年、富士弦楽器は三村豊氏(前々社長)、横内祐一郎氏(現会長)を中心に創業を始めた。最初はクラシック・ギターからの出発で、昭和36年になると、エレキ・ギターの製作にも乗り出す。この時富士弦楽器は、実は日本音波の下請けからエレキ・ギターの製作を始めた。そのいきさつはこうである。以下は横内氏のお話だ。

「昭和36年かな、私どもの工場に新しく工場長が入ったんですよ。丸山正という人ですが。丸山さんが工場長になって、私どもはクラシック・ギターを作っていたんですが、社長がもう少し新しいギターを作りたいって。

そんなことを言いだして、それじや下請けから始めるかってことになりましたね。東京テスコとつながってみようっていうことで松田童龍さんをお願いにいったんですよ。そしたら、それはありがたいってことでやることになったんです。

こうして富士弦では日本音波のエレキを手がけるようになる。日本音波の指導の下にギターを作り、それを納入するという形だった。

「EB-1とEB-2というベースを初めに受けたんです。それは1ピックアップと2ピックアップで。とってもいい形だったんですね。今でもそう思ってますけど。そのEB-1のサンプルを持ってきて、材料をいろいろ調べて。作り方は向こうで教わったわけですよ。それは全部工場長が請け負ったんです。

その他富士弦楽器ではJ-1、J-2なども製作した。ところが、そのうちに大きな問題が発生した。

「で、やっていましたら、木の乾燥が良くないもんだから、ネックが縮んでくるんです。そうすると、フレットが横に飛び出しちゃう。これじゃいけないってことで、クレームがついて。そこで丸山工場長が東京に行ったんです。そしたら向こうの社長と気が合って、これから力になってくれるってことになっちゃった。それで、あなた独立してやってみないかってことになって。」

富士弦の丸山氏は日本音波の松田氏と手を組んだ。そして、松本から北へ少し行ったところにある豊科に日本音波の下請け工場としてテスコ弦楽器株式会社を設立したのである。もちろんこの時日本音波も出資していた。昭和37年のことであつた。これがもとで富士弦は日本音

波との関係を解消している。テスコ弦楽器について橋本氏は次のように語る。

「テスコ弦楽器ができる前は富士弦で…。それが大量に作り始めた初めの頃だろうね(笑)。ところが、精度が悪いから俺がクレームをつけたわけだ。そしたら、“それじやあ橋本さん、私にやらせてください。私が工場を作ってやりましょう”と言い出したのが丸山さんなんだ。少し資本を出してくれと向こうが言うから、社長と相談して少し金を出そうと。豊科っていう松本のちよっと先まで地所を見にいってね。ここへ建てましょうってことになって、工場を建てて。機械を入れて、塗装場も作って。ジャンジャンやれるってわけね。もうそこができてからたしかいい安心だったね。それまでは富士弦にやらせてたんだ。今はそれは立派なものを作ってるらしいね。

今回、横内氏自らの口からは聞くことはできなかったが、元テスコ関係者の方々の話をつなぎ合わせると、どうやら下請け期間中少しの間セミアコのEP-8(あるいは9)を大量に作ったということである。この前、おそらく昭和36年頃に日本音波はナルダンとの取り引きをやめていた。そのあとは九州のマルハ楽器というところからピックアップギターのボディを大量に仕入れ始めた。この頃には登坂本工でもホロウ・ボディを作るようになっていたが、セミアコが飛ぶように売れていたため生産が間に合わなくなった。そこで富士弦にもボディ生産を依頼したという。そのため、昭和36~37年頃のセミアコは富士弦楽器、マルハ楽器、登坂本工、ナルダンのものが混在していることになる。しかし、それもテスコ弦楽器ができるまでのことであつた。

昭和37年にテスコ弦楽器ができ、大量生産が可能になると、日本音波は続々とソリッド・ギターの新製品を発表する。テスコ弦楽器ではボディ、ネックを作り、塗装がすまされると、浮間の工場へ運ばれて完成品が出来上がるという方式だった。また、アンプにおいてもチェックメイト・シリーズなどの人気機種を次々と送り出した。さらに、エレキ・ベースや、テスココードと言った電子オルガン、はてはワイアレス・システムまで作り出すのである。36年にはベンチャーズがデビューしており、世は次第にエレキ・インスト・ブームの様相を呈してきていた。エレキが飛ぶように売れ出した。この頃には完全にソリッド・ギターが主流になっていて、グヤトーンも負けじと次々に新製品を出していた。こうして、昭和37年にはJ-3、J-5、T-60ぐらいであったソリッドに、昭和38年頃にはMJ、WG、SS、SDなどが加わり、より強力なラインナップになっていったのである。

昭和39年5月には新製品として日本初のスピーカー付きエレキのTRG-1、グリップ穴付きのTG-64などの斬新なモデルを発表。そして、この年の10月1日に日本音波は社名をテスコ株式会社に変更。エレキの時代にふさわしくブランド・イメージを強調するためであった。前年にはビートルズがデビュー・アルバムを発表し、ベンチャーズの人気もウナギ登りに上がっていた。1億総エレキ化はもう時間の問題であった。

エレキが流行りだしたいきさつを橋本氏はこう語る。「エレキが流行りだしたのはこういういきさつがあるんだね。浮間にいた頃にエレキが流行ったんですよ。ベンチャーズが。それまではロックもあったんだけど、大きな変化があったのはベンチャーズからだね。」

「米軍のキャンプがどっかにあってね。坊やたちが会社遊びにくるのよ。そいでギターを買いにくるわけ。ところが、いっぺん泥棒されて持ち逃げされたことがあってね。キャンプへ追っかけていったら、軍法会議に回すんだ何だかってことになったことがあるんだ。でも、その連中が非常にうまいんで、初めは泥棒したけれども、あと可愛がってやったわけ。その連中を連れてヤマハの池袋店でデモンストレーションで弾かせたりね。名古屋に行ったり、銀座でやったり。そうしてるうちに、どうも異様な音楽をやるんだ。テケテケテケテケっていうよう

な(笑)。これがなんか面白いなと思って。で、彼らを連れて、うちのギターを売ってくれてる名古屋の日本楽器で宣伝のためにやらせてくれて言ったら、初めはやかましいからとかなんとか言ってたよ。だけど、やり始めたらお客さんが来るじゃない。で、俺は行く途中の汽車の中で連中に曲目を聞いて、「ダイヤモンド・ヘッド」だとか「十番街の殺人」だとかね。その意味を聞いて訳して日本語で解説を入れながら、音楽会をやったわけ。けっこうウケたよ。僕も若くて元気だったからね(笑)。「ウォーク・ドント・ラン」なら「急がば回れ」とかさ。ベンチャーズのヤツは、今まで聴いてたロックとはちょっとスタイルが違うでしょ。米軍のキャンプにも行ってみたら、子供たちが集まってパーティでパーッとやってるわけ。うまいんだ(笑)。これは面白いなと思ってね。まだ有名になる前にベンチャーズは僕らの興味の中に入った」。

この調子で橋本氏は全国を行脚して回った。各地の楽器屋の店頭でデモンストレーションを開き、地味ながらエレキ・ギターを人々の目に焼きつけていったわけである。そして、いよいよ昭和40年1月、ベンチャーズがやって来た！

エレキ・ブーム期

ベンチャーズが来日すると、エレキ・ブームは火に油を注がれたような勢いで日本中に広がった。ちょっと前まではエレキ・メーカーと言えば、テスコ、グヤトーンだけであったのが、全音、ビクター、コロムビア、プリザントなどのエレキが出回り、バイオリンの鈴木楽器、ハーモニカのトンボまでがエレキを作った。ヤマハがエレキを作り始めたのもこの頃である。また、ヤマハは一時テスコのTG-64をOEMとして買い取りYG-64として発売した。他にも雨後の筈のようにさまざまなギター・メーカーが出現した。木に関係ある商売ならなんでも、桶屋や下駄屋までギターを作ったと言われる時代である。加山雄三主演の『エレキの若大将』が作られたのもこの年だ。40年の暮れに公開されたこの映画はブームの頂点を象徴するものであったと言えよう。この映画はテスコの協賛で作られたもので、キャストは皆テスコのギターを使っていた。また、テスコは大々的にエレキ・コンテストを開いた。その模様は東京12チャンネルで放送され、誰も彼もが「テケテケテケテケ」、ベンチャーズを弾きまくった。その様子は『エレキの若大将』でも見ることが出来る。

とにかくエレキは売れた。ギターの格好をしてさえいれば売れると言われたほどである。その中でもテスコとグヤトーンのエレキは別格であった。フェンダー、モズライトも確かに人気があったが、現実的には皆テスコがグヤを欲しがっていたのだ。巷は、テスコ派とグヤ派に分かれ、両ブランドの人気はとどまるところを知らなかった。

エレキ・ブームは国内に限ったことではなかった。アメリカやヨーロッパでもロックやインストゥルメント・ミュージックが流行り、爆発的なブームを呼んでいた。テスコは昭和33年頃から海外への輸出を始めており、年々その需要は増えていった。グヤトーンも然りである。また、富士弦楽器の横内氏が単身アメリカにのり込んだ。そして、現地のバイヤー（楽器問屋）に直接ギターを売り込み、苦勞の末に売買契約を結んでいる。注文が殺到し、富士弦楽器でも昭和39年頃からエレキの大量輸出が始まった。輸出されたギターには現地のバイヤーが指定するブランド名がつけられた。こうして日本製のエレキ・ギターは海外にも広がっていった。

テスコは昭和40年4月、丸紅を通じてアメリカの卸売商、WMI(ウェイス・ミュージカル・インストゥルメント)社と販売契約を結び、アメリカ全土への輸出を同社に一手に引き受けさせることになった。それまではいくつかのバイヤーと個々に結んで小規模に販売していたのが、

この契約によって輸出は大きく拡大する。この時に、WMIが指定してきたブランド名がTeisco Del Reyであった。以後、アメリカに輸出されるギターにはすべてこのブランドがつけられた。テスコ弦楽器の大生産力はアメリカでの需要を満たしていた。WMIはもともとカメラの卸商であり、エレキのブームを見込んで楽器にも進出してきたばかりであったという。

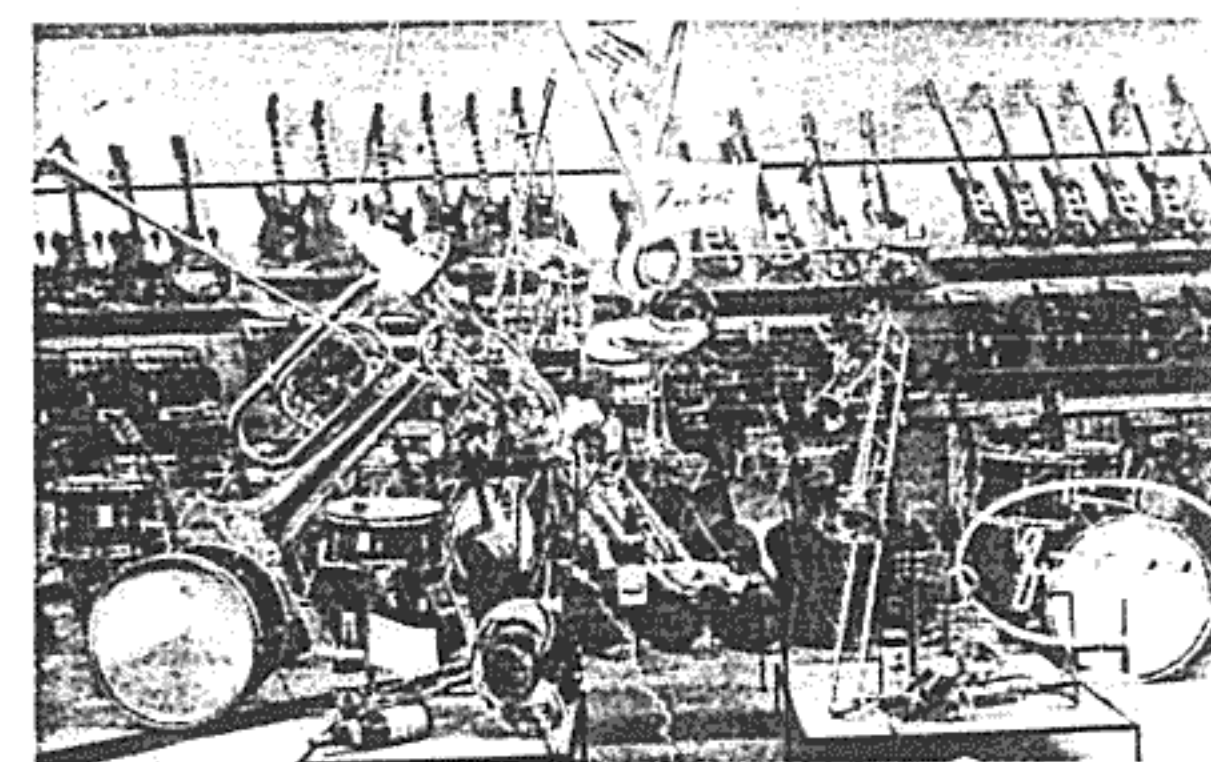
「WMIはミノルタをアメリカで売れるようにした人たちのよ。で、カメラはもう底を突いたと、こっから先は面白くない。それはそれでやって、これからは楽器だっていうんで、丸紅を通じてうちへアタックしてきたわけ。それでそこを通して輸出するようになったんです。ものすごいキャンペーンを張るんですよ。少年雑誌やなんかでダーッと大宣伝をやったね。そういうのについてっちゃあ、手助けをしたんだけどね(笑)。アメリカはとにかく売ったんだよ！すごい宣伝をしたからね」。



LAでのWMI社とのレセプション風景。



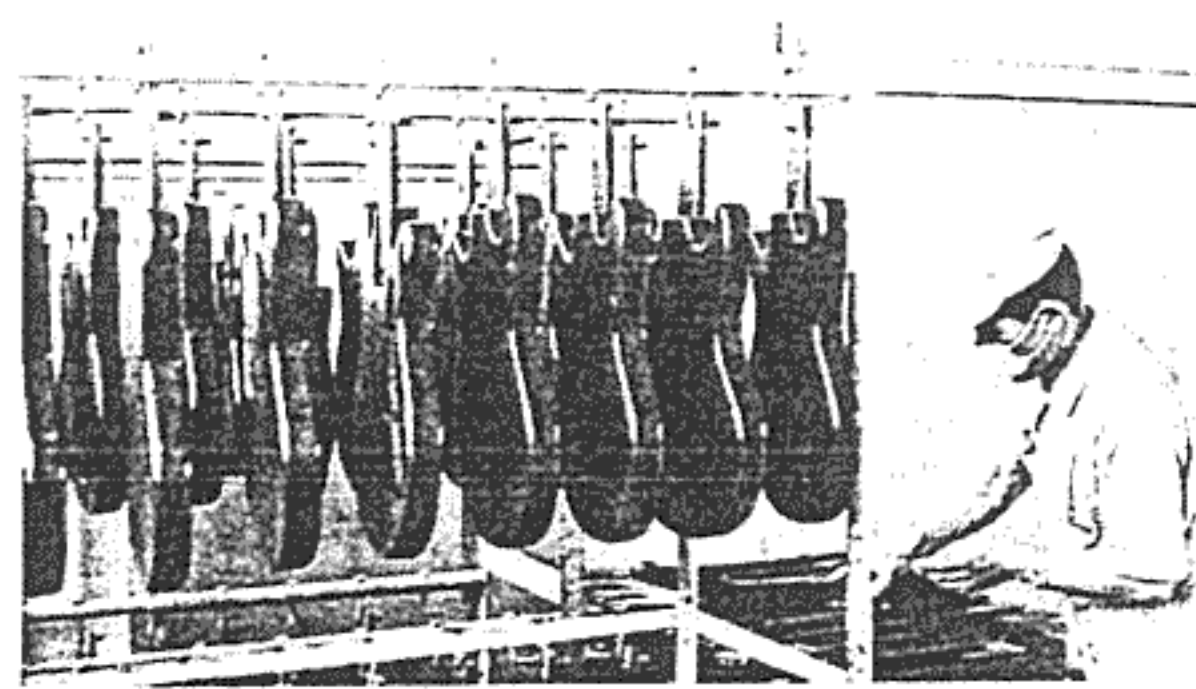
こちらも同レセプション。外人さんが肩のところに付けているのはテスコのワイアレス・トランスミッターだ。



デンマークのお店の一風景。日本製のエレキがズラリ！



BSS社のバス。ちゃんとテスコ・デル・レイのロゴが入っている。おもちゃのような可愛さだ。



テスコ弦楽器の塗装工場



同じく「弦楽器の工場」。ボディを整形している様子。

さらにテスコの輸出はヨーロッパにも拡大される。デンマークのBSS（ブルナズ・サウンド・サプライ）社というバイヤーと契約を結び、そこを拠点にデンマーク、オランダ、フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、西ドイツにも輸出されていった。まさに飛ぶ鳥を落とす勢いだったのだ。

昭和39年に会社名を改める少し前、それまでギターのデザインから海外の営業まで八面六臂の活躍をしていた橋本氏であったが、営業にさらに専念するため、ギター・デザイナーを採用した。さらに40年にもうひとりデザイナーを入社させている。昭和40年以降のテスコのギターにいくらか作風の違いが見られるのはこのためである。昭和40年にはエレキ・ブームは最高潮に達し、国内でもテスコのギターは順調であった。しかし、ここでブームに水を差す大きな出来事が起こる。10月に栃木県足利市教育委員会が発した“エレキ禁止令”なるものである。あまりのエレキ人気のすさまじさに大人たちは慌てた。エレキ＝不良の認識が出来上がり、子供たちはエレキを取り上げられた。今では考えられないようなことだが、この頃に各地にエレキ追放運動が起こり、エレキを禁止する中学や高校が輩出していった。これはテスコにはもちろん、各エレキ・メーカーにとってかなりの打撃だった。売り上げは日に見えて落ち、倒産するところも出た。

「あれからスツとこうなっちゃったんだね。テレビでは細川隆元さんというのがさ、“エレキ亡国論”を吐いたわけよ。不良扱いにしたわけね。ちょっと覚醒剤と絡んだヤツがひとりやふたりいたんだね。あんなものをやるから悪いんだってテレビでやったわけ。そしたら一斉に学校がエレキ禁止ってことになったわけだよ」。

エレキはだんだん下火になっていく状況であったが、昭和41年の中期、テスコは桶川に新工場を完成させ、6月29日より操業を始めていた。この工場は鉄筋コンクリート建て、冷暖房完備、最新の設備を持ち、敷地面積は約2万平方メートルという大工場であった。また、このあと本社は東京都港区三田に移転している。この年にはKシリーズ、スペクトラム5、Vシリーズ、SM-2Lが新製品として発売になった。Kシリーズは好評だったが、全体の売り上げは芳しくなく、対前年比の半分にまで落ち込んだ。一方、海外でも次第にエレキ熱は醒めて、輸出状況も悪化していった。

「ぼもんだから、うちはどんどん作ってるのにさ、全部入りだ(笑)。桶川の倉庫の屋根裏へ全部ギターをしまったんだ。置くとこないから。それから、その頃は楽器屋だけでなく、電気屋さんにもエレキが置いてあったのよ。それまでは楽器屋が楽器を置いて、電気屋は電気を売るのが専門だったわけ。でもよく売れるしアンプを使うし、電気に関係があるもんだから、電気屋でも売り始めたわけよ。だけど、下火になってくると、電気屋が一斉にやめたわけ。とにかく全部ダメなのよ。倉庫へも、うんと積んじゃってね」。

昭和41年と言えば、ビートルズが来日した年である。前年あたりから盛り上がりだしたビートルズ人気は、この頃最高潮に達しようとしていた。音楽の流行も次第にビートルズを中心としたブリティッシュ・ビートに移り変わり、あれほど隆盛を極めたエレキ・インストが衰えてきた。そして、ビートルズに影響されたボーカル・グループが増え始めたのである。時代の主導権は確実にペンチャーズからビートルズに移ろうとしていた。それと共にエレキ・ギターの流行もソリッドから、ビートルズが使う箱型へと移っていった。そして、グループ・サウンズ時代がやってくるのだ。

テスコも高級セミアコのVシリーズを発売して応戦した。しかしそれまでのソリッド中心のラインナップの中ではもの数ではなかった。かくしてテスコの経営の息詰まりは深刻化した。昭和41年12月中旬、テスコはついに力尽きた。そして、それまでOEM製品として電子オル



テスコ・エレキ合戦のひとコマ。審査がすんで商品（なんと優勝はハワイ旅行）を渡すところだ。中央でスーツを着ているのが社長の松田重龍氏。審査員として招かれた大橋巨泉も顔を見えている。

ガンなどを供給していた河合楽器の傘下に入るることになった。

その後…現在まで

河合楽器に吸収合併されたあと、実質上ギター開発の責任者であった橋本氏は、首脳陣のひとりとしてテスコに残った。そして、新たに浜松でテスコ商事という形で再出発する。昭和42年の前半のことだ。桶川の工場はテスコ株式会社のまま河合楽器傘下の工場として存続することになった。この頃はGSブーム華やかかなりし時代であった。ワイルド・ワンズ、タイガース、ブルーコメッツといったグループが熱狂的な人気を獲得し、続々とGSのアイドルが誕生していった。ギターの主流は完全に箱型に移っていた。テスコ商事は、テスコ時代のVシリーズを引き続き発売し、ソリッドのほとんどのモデルも継続した。そして、新製品の第1弾として、バイオリン型ベースのFB-2、ソリッドのDG-67を発売する。GSブームは次第に加熱し、一時のエレキ・ブームほどではないにしても、ギター業界にも活気が戻ってきた。

テスコの社長であった松田氏は一時河合楽器に残留していたが、42年の中期退社し、新たに日本音波株式会社、通称“アイドル楽器”を設立した。アイドルはその後、非常にユニークなギターやアンプなどを続々と発売していく。グヤトーンはシャープ5モデルやリッケンバッカーのコピー・モデルなどを発表して勢いを盛り返した。そして、ハニー、ファーストマンといった新進メーカーが箱型のギターを中心のラインナップに据えて登場する。ここに第二次エレキ・ブームが到来したのだ。

「テスコ商事になってからも第二次のエレキ・ブームが起きたのよ。だからテレビじゃなかったけれども、ラジオでずいぶんエレキ・コンテストをやったりね。北海道から九州まであちこちやってね。素晴らしい商品も出したりしたんだけど、もとのテスコの時ほどは…。河合の一角だったからね」。

さて、ここでちょっと話を戻そう。テスコは河合楽器に吸収合併されたが、テスコ弦楽器はいったいどうなっていたのか？ もともとテスコ弦楽器はテスコの下請け会社ではあるが別経営であったため、河合楽器の傘下には入らなかった。そして、テスコ商事の下請けとしてボディを作り始める。

「テスコ商事は浜松の河合の本社の中にあつたんだ。それで俺は東京からふたりぐらい連れて行ったのかな。ひとは貿易部へ入って、河合の社員が3、4人うちへ入って。それでテスコ商事っていうのを作った。だけど、あんなとこで作ってもどうにもならんでしょ。工場は桶川にあるし。ボディは松本のテスコ弦楽器で作らせて」。

さらにテスコ商事は河合楽器の工場でもボディを作っていた。機種によって工場を分けたのである。

テスコ弦楽器は主にテスコ商事のボディを作っていたが、次第に外部メーカーの注文にも応じるようになり、完成品を作るまでになる。そして、バイヤーズ・ブランドのギターを大量に生産した。さらに、昭和43年7月には、自社ブランドのエクセトロを発売している。

テスコ商事はその後意欲的に新製品を開発する。昭和42年の中期にスペクトラム22が発売され、43年1月には、2台のセミアコが発売された。ひとつはメイ・クイーン、もうひとつはバンパーであった。この時橋本氏は新製品にかかる意気込みを次のように語っている。

「楽器業界の革命児ともいえる電気楽器の新開発品を、新年を契機として続々と新発売し、老舗テスコ楽器の真価を再認識してもらう」(楽器商報昭和43年1月号)。

輸出ブランドについて

日本のエレキ・ギターの輸出は昭和37年頃から急速に伸びていった。テスコばかりでなく、グヤトーン、プリザントの新興楽器、全音、富士弦楽器なども積極的にエレキ・ギターの輸出を展開していた。日本のギターは輸出されると現地のバイヤーのブランド名がつけられた。どのバイヤーと取引をするかで、同じギターでも違うブランドがついたり、違うギターでも同じブランドがついたりした。テスコはWMI社と契約すると、Teisco Del Reyというブランド名がつけられた。Del Reyはスペイン語で、英語で言うと“of the king”といった意味。デル・レイ・ロゴのバックにある王冠はその意味だったのだ。また、テスコはWMI社と契約してからもB&J社(KENTブランド)と別ルートで取引をしていた。B&J社は主にグヤトーンを扱っていたバイヤーだ。KENTブランドでテスコとグヤトーンの両方が存在するのはこのためである。他にWorld TeiscoやKimberlyなどが存在するが、どこのものか不明。

橋本氏がいる限り、テスコに変わりはなかった。実際テスコ商事の製品はかなりの売れ行きを示し、テスコ・ブランドは健在であった。昭和43年中頃には、ワイルドなボディのファイアー・バード、ロング・ホーンのファントム、さらにテスコ初のエレアコ、ミッシェル26を発表、昭和44年1月にはボディにグラフィックEQを内蔵した、EV-49T、EV-52Tを発表した。

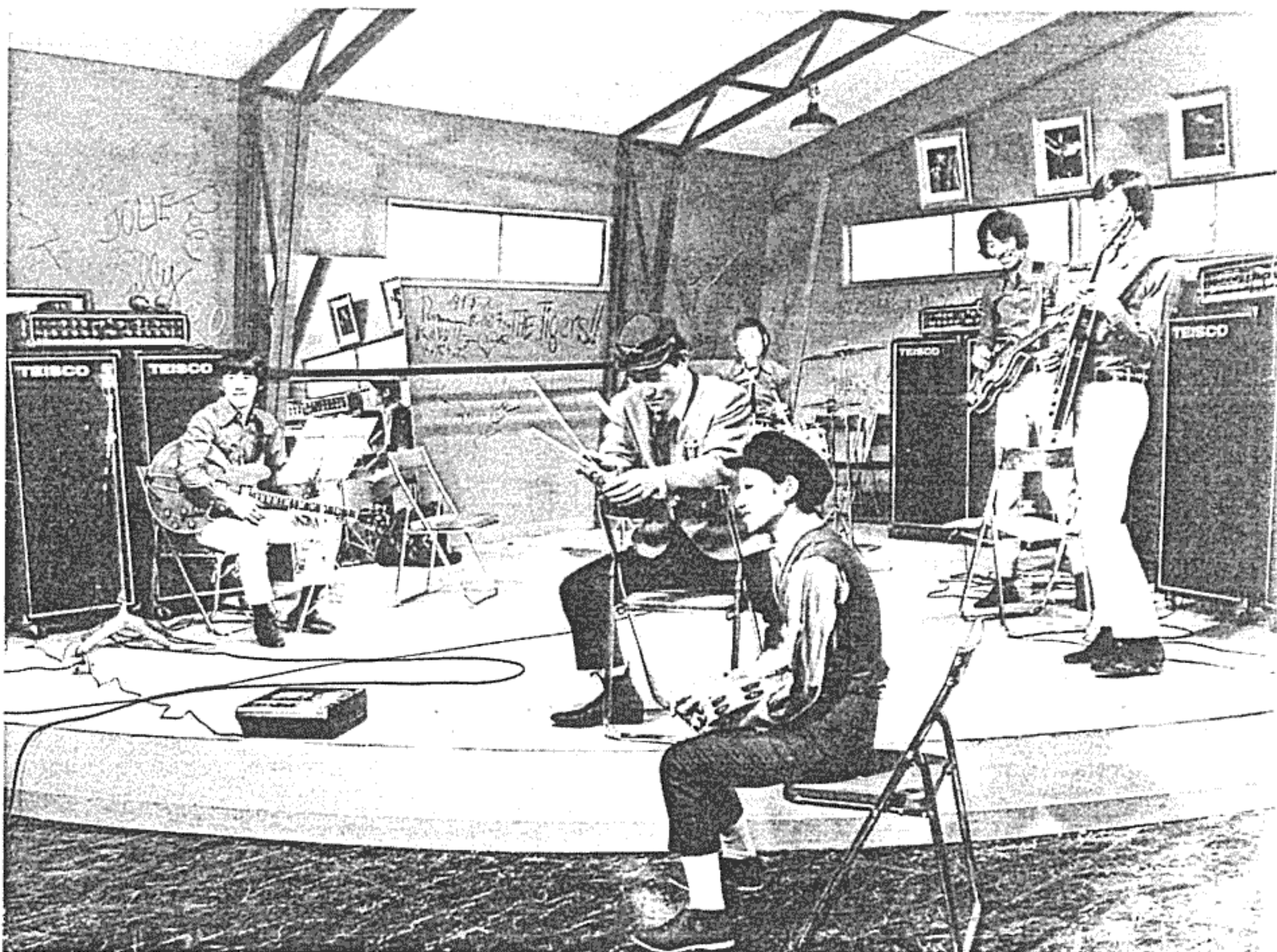
昭和44年になると、GSブームに陰りが見え始めた。時代は次なるサイケへと向かっていたのである。昭和43年にビートルズが発表した『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』はサイケ・ブームへの導火線となった。ジミ・ヘンドリックスが新しいヒーローとして登場し、ウッドストックではヒッピー文化を象徴するような野外フェスティバルが開かれた。加えてベトナム戦争による反戦ムードが高まり、反戦フォークがもてはやされた。そしてまたエレキが売れなくなった。グヤトーン、ハニー、ファーストマン、アイドルなど国内メーカーの倒産が相次いだ。まさに嵐のような60年代であった。日本の60年代はエレキに始まり、エレキに終わったのである。

テスコ商事ではEV以降目立った動きが見えなくなる。実はこれが橋本氏が手がけた最後のギターであった。また、この頃のことを橋本氏は次のように語る。

「そのうちに俺の神経もギターってのはもうダメだなあと思って、鍵盤楽器の方に魅力を感じたから、あまり力を入れなくなった傾向があるね」。

昭和45年の中頃になると、河合楽器の機構変えが行なわれ、テスコ商事はテスコ株式会社（桶川工場）の一部門となる。橋本氏は東京新宿の営業所に移り、桶川工場に週に2、3度通うという日々になった。この頃からテスコはキーボードにより一層力を入れるようになる。桶川の工場では、テスココードや河合楽器のドリマトーンといったキーボードと音響PAが主流になった。そして、橋本氏は定年を迎え、テスコを円満に退社する。

テスコ株式会社はその後も存続し、今でも桶川工場は操業している。しかし橋本氏がやめるとすぐ、ギターからは手を引いてしまった。昭和40年代のコピー・ギター・ブームの頃、レス・ポールやテレキャスターのコピーを一時作ったが、それ以降ギターを作った形跡はない。



タイガースの映画の1シーン。皆テスコのアンプを従えてゴキゲンだ。

橋本氏の勇退を以て実質上のテスコの歴史は幕を閉じたと考えてよい。テスコ・ギター＝橋本氏であり、橋本氏＝テスコ・ギターであった。戦後の日本にエレキなるものの存在をアピールし、全国を走り回った。当時、エレキは未知の楽器であった。アンプから音が出るのが信じられなかった時代であった。橋本氏は誰もが初めて見るこの楽器を地道な努力で大衆のものにしてきたのだ。エレキ・ブームはまさにその賜物であったとさえ言える。ベンチャーズもビートルズもそのきっかけにすぎなかったかもしれない。テスコのギターは日本中に広がった。そして実際にプレイヤーたちの手に触れた。中にはプロを夢見るギター少年もいただろう。駆け出しのプロ・ギ

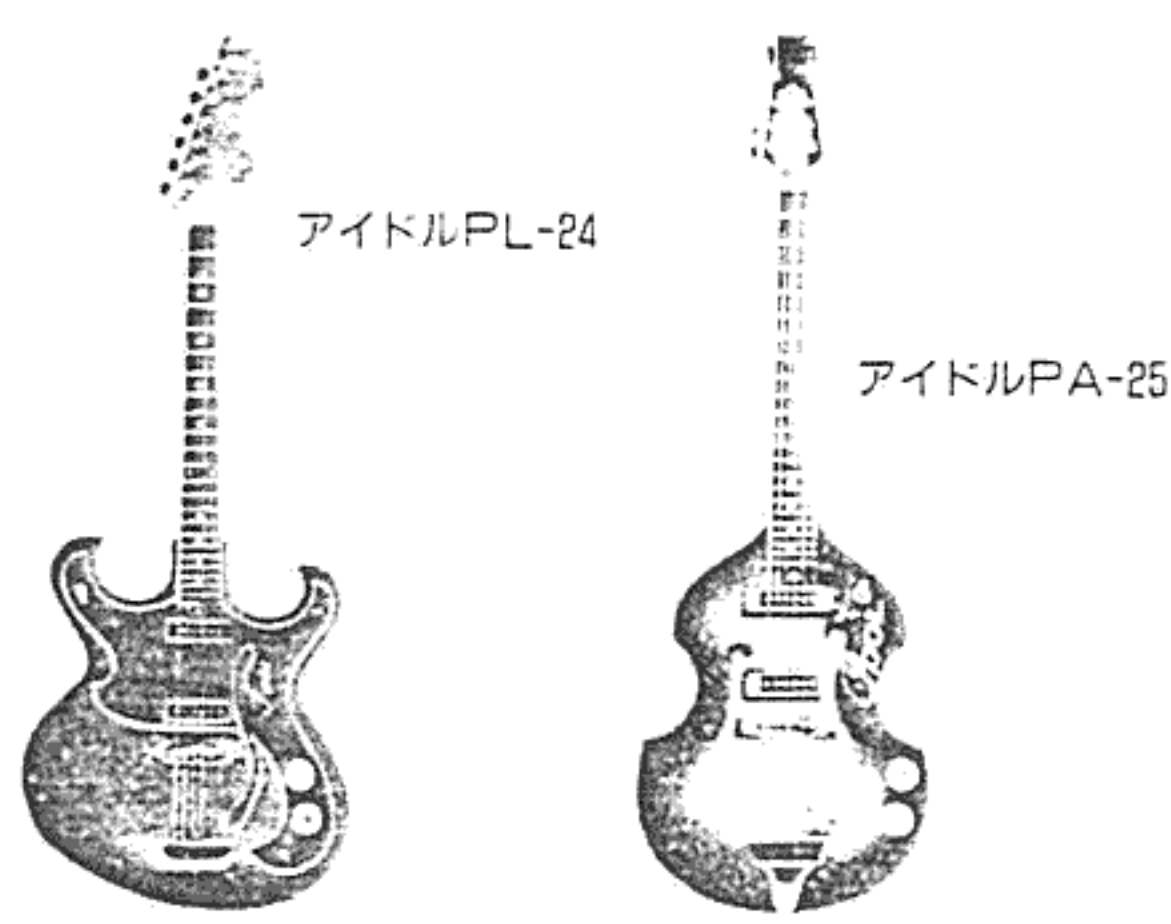
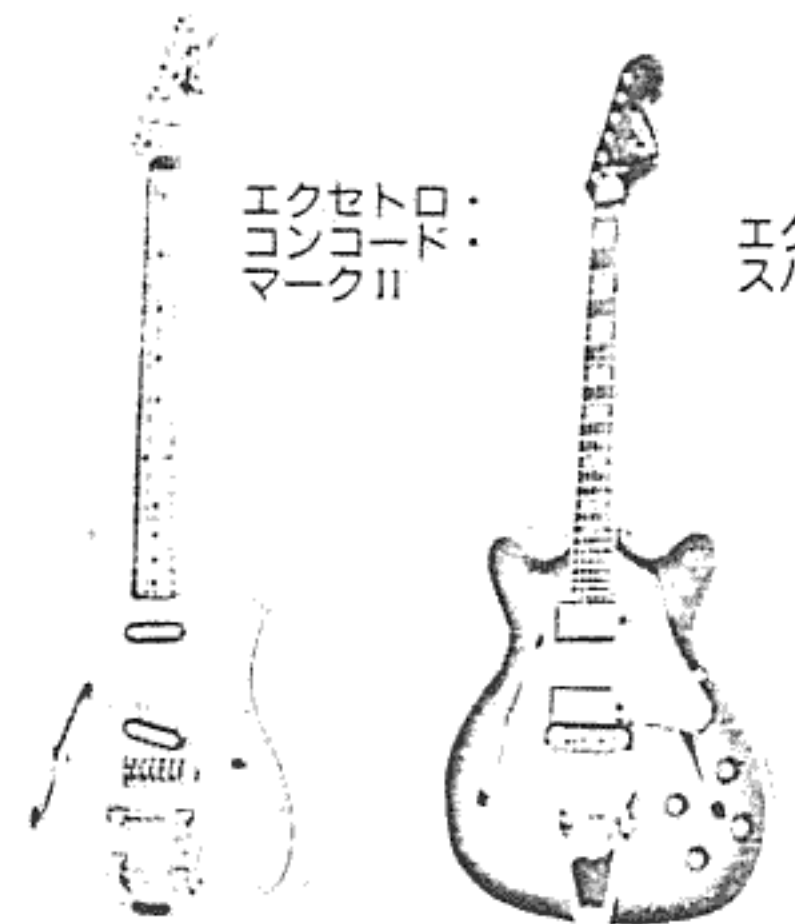
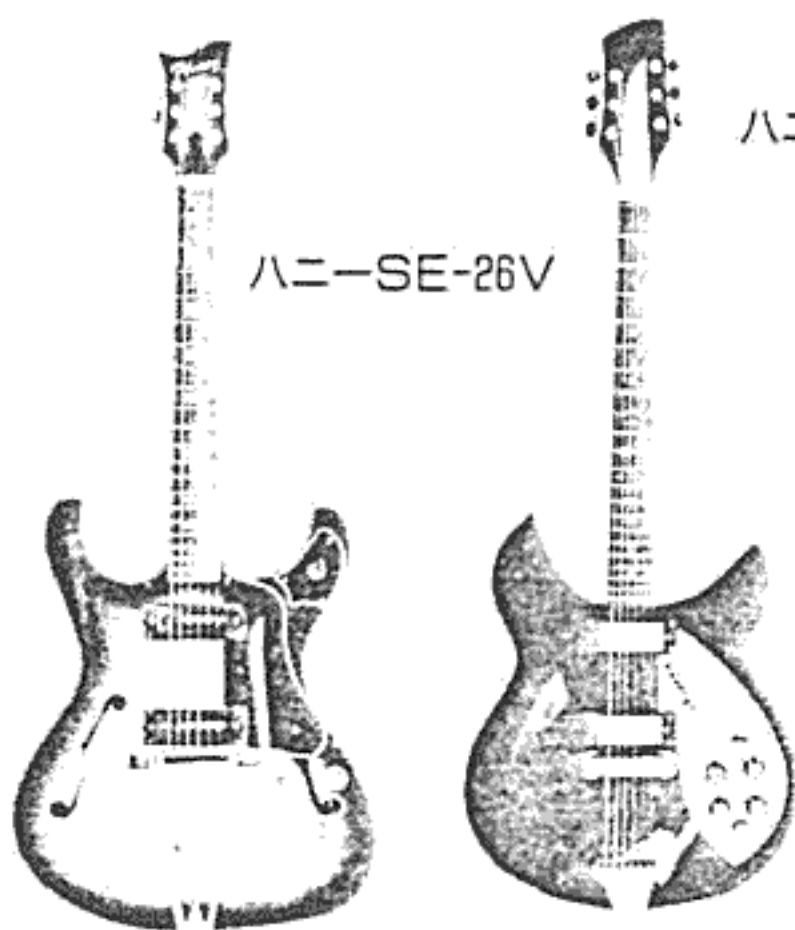
タリストもいただろう。すべては彼らのためであった。大胆なアイディアに溢れたギターの数々を生み出し、若者に夢を与え、日本中をエレキ熱の渦へと巻き込んだ功労者は、まぎれもなく橋本氏のテスコであった。さらに、テスコのギターは世界へもはばたいていった。アメリカを、ヨーロッパを一時は嵐のように席卷し、多くのギタリストたちに愛されたのだ。その勢いはまるで大輪の打ち上げ花火のようであった。それははかなく、美しく、見事な花火だったのだ。このようなメーカーが日本に存在したことを我々は誇りにし、感謝しなければならない。日本のエレキの偉大なるパイオニア、テスコはこれからも忘れ去られることはないであろう。

ハニー、ファーストマン、アイドル、テスコ弦楽器

ここでハニー、ファーストマン、アイドル、テスコ弦楽器についてもう少し詳しく触れておきたい。前述のようにテスコ弦楽器はテスコの下請けとして作られた会社で、テスコが河合に吸収されたあとはテスコ商事の下請けとしてボディを作っていた。そして、GSブーム時には他のメーカーのボディも作るようになった。それがハニーであり、ファーストマンであったが、実は両方とも元テスコのメンバーによって作られた会社であったのだ。ハニーの発足は昭和42年2月、ファーストマンはやはり昭和42年のいつ頃か。テスコ商事も42年の前半。この3つのメーカーは同じところでボディを作っていたわけ。

しかしテスコ弦楽器は金融引き締めの影響で昭和43年4月に一度倒産してしまう。ここで、丸山社長が去った。同年6月テスコ弦楽器は再建されたが、今までのような下請けには甘んじていられず独自のブランドで完成品も作るようになった。これがエクセトロである。さて、アイドルはというと、実はテスコ弦楽器とは取り引きがなかった。アイドルは長野県丸山木工なところで作っていたそうである（しかしなんとなく名字が気になるでしょ）。

そして昭和44年になると、ハニーもファーストマンもアイドルも倒産してしまった。7月にはテスコ弦楽器も力尽きた。ウーム、だけどテスコ分派だけあってみんななんとなく共通する魅力があるんだよね。そこで右にチラッとだけそれらをお見せしよう。



1. 元営業部長 橋本博義氏インタビュー

デザインに営業に大活躍した橋本氏に、
テスコについてお話を伺った。

●アメリカでは輸出がずいぶん伸びたそうですが、ヨーロッパはどうだったんですか？

○英国には直接は行かなかったけど、どっかに任せただけな。デンマークを拠点にして、スウェーデンもノルウェーもフィンランドも西ドイツもね。デンマークのあそこ（BSS社）が引き受けてくれたからね。オランダもあったしね。

タリアやフランスは？

○イタリア、フランスは全然行かなかった。イタリア、フランスはどうもエレキ・ギターはあんまり盛んじゃなかったみたいだね。アメリカ、カナダ。カナダは行ったね。カナダはデヴィスさんという人と仲良くしてモントリオールに何回も行ったね。南米は行かないね。アメリカはセントルイス、サンアントニオ、ロサンゼルスはもちろん。

●WMI社とやるようになったわけは？

○丸紅を経由してうちへ申し込んできたんだ。WMIとやるようになってからは、もうアメリカは一手に引き受けましようということになった。それまではNYもあったし、サンアントニオ、ロサンゼルスなど別々に出してたわけ。社長と二人で密次喜多道中をやったわけだ。もうひとつ大きなところがあったね。クリーブランドに大きな問屋さんがあって。そこも取り引きした。もうひとつシカゴに有名な通信販売の会社があるでしょ。シアーズ・ローバックとやったんだ。シアーズ・ローバックと組んで一番最後の商品が、TRG-1なんだ。あれは大変な会社なんだよ。銀行を持ってるしね。会社の中に車が入ってるんだ（笑）。その時は売り込みにいったんだ。飛び込みでね。それでシアーズ・ローバックと取り引きが始まったんだけど（笑）。面白かったな。アンプ付きギターが。けっこうシアーズ・ローバックへ売ったよ。あれは他では売れなかったけど、シアーズ・ローバックには売れたんだ。面白いこともあるもんだね。

●輸出された日本のギターはどんな売り方をされてたんですか？

○もうひとつ有名な通信販売の会社でラフェッティというのもあったんだ。ここが通信販売とは別にお店を開くんですよ。とにかくアメリカは広いでしょ。この町で何日から何日まで売るといって。前もって広告を出しとくわけ。武道館のようなところを借りきってね。そこで楽器をパッと売るわけ。そこで2日はどやたら、今度は次で3日やるとか。そんな方式だったわけ。そのやり方はすごい激しいからね（笑）。大きなトラック何十台も使ってた。今日はなんとか市で販売の予定になってるんだとか。大がかりな販売方法をやってるわけね。なるほど、これじゃ輸出すればすごいなと思ったよ。

●いかにもアメリカ人的ですね。

○アメリカでは昔は楽器屋さんが楽器店で楽器を売ってたわけ。ところが、大きなスーパーマーケットが楽器を扱うようになったんだ。我々の時代になって。時代が変わってきたんだね。NYの42番街なんか行っても老舗の楽器店があったわけ。ところがそういうところで売らんじゃなくて、エレキのせいだろうと思うんだけど、大衆化されてきたわけね。だから大きなスーパーが楽器を扱うようになったわけ。そうすると、老舗の楽器屋さんたち

は面白くないから、楽器なんてそういうところで売らんじゃないっていう抵抗があったんだ。それに反抗して、楽器は大衆的なもんだっていうんで、大宣伝をしてね。昔は大宣伝なんかやらなかったらしいんだ。それが我々の時代からどんどん大がかりにやるようになってきたわけね。あれでいつべんかわかってきちゃったんだね。販売の感覚が変わってきちゃったのね。だからWMIなんかも大がかりに売ってというスタイルの売り方をしたんだね。僕らがやるちょっと前はそうじゃなかったのよ。●昔は輸出する場合は直接楽器屋さんと交渉してたわけですか？

○昔はね。そういう店も何件かある。あと、何件か有名な卸屋さんがちょっとあってね。そこを経由して楽器屋さんに置いてもらうシステムだった。それが、今度大きなスーパーみたいなところへバーンと出すシステムになってきちゃったから大変だね（笑）。

●国内と海外の比率ってどれぐらいだったんですか？

○一時海外がちょっと多かったこともあるけど、だいたい半々ぐらいだね。

●テスコはどういう意味なんですか？

○テスコはね、これが難しいんだ。俺が戦争から帰って来た時に、金づつのがテスコっていう名前をつけてたわけだ。俺はちょっと変わった名前だと思って、いい名前じゃないかなと思ってたんだ。そしたらね、全然意味ないの。だけどあっちの系統なのよ。メキシコじゃないかな。とにかくラテン系の。まあ、アイドルみたいな愛玩物とか、可愛いものに使うんだっていうことはわかったんだけどね。だけどそれを辞書で調べてみてもない。それで、本当はeを発音しないんだ。ホントはティスコなんだ。一番最初はティスコなんだ。だけど、ティってのは日本で言えないからテスコにしちゃって。

●外人はティスコって言うんですよ。

○そうそう。外人に言わせるとティスコ、ティスコって言うよ。

●英語ではなさそうですね。

○英語じゃない。確かメキシコの感じなんだ。それで辞書ひいてもないわ。だけど固有名詞だからいいだろうっていうんで、それでそうしたわけね。そのうちにさ、競馬でテスコって出たじゃない。

●は？

○知らない？

●馬の名前でテスコっていうんですか？

○そうそう。競馬馬でテスコっていう有名な馬があるんだ。それで、話は別なんだけど、六本木にね、テスコっていうナイト・クラブがあったんだ。それで、こりゃいいやっていうんで、外国から来たお客さんを連れて晩飯かなんか食いにいく時にそこを使ってた。うちとは関係ないんだけど、同じ名前なんだと、言って。馬の名前だと言ったらわかった。馬主が作ったクラブだと思っただ。それで俺は電子オルガンとひとつ寄付して。ガーネットってやつだ。それでテスコへしょっちゅうニュージーランドのお客さんが来たりね。ニュージーランドのお客さんをよく連れてったわけな。アメリカのお客さんも連れていったしね。六本木にまだテスコってあるらしいね。でもそれはうちは入ってないわね。

●当時フェンダーやギブソンをライバルみたいに思ってた？

○いやいや、ギブソンはやっぱり良かったよ。それはなんたってねえ、ギブソンは優秀だったよ。楽器作りに年季が入ってるから。電気音というよりも、ネックの握り具合とか感じが全然いいのよ。無理して弦を押さえるようなことはなかったからね。トコトコトコトコ弾けるんだね。滑らかに滑らかに。とにかく良かったよ。フェンダーはフェンダーでいいんだけど、絶品というか、間違いないのは、立派なあっていうのはギブソンだった。ギブソンはエレキじゃないのにもいいのあるでしょ。ラウンド・ホールのやつだけじゃなくて、Fホー

ルのやつ。音もいいしね、間違いがないっていうのがギブソンなんだよ。

●海外にはまだ他のメーカーがありましたよね。ダンエレクトロとかナショナルとか。あの頃どんなギターを出すかっていうことは意識してましたか？

○うーん。高かったしね、べらぼうに。まずどんなに俺たちが一生懸命作っても、ギブソンということになると倍以上したからね。関税の問題もあったのかもしれないけど、高かったね。エレキの場合エビフォンとかまだいろいろあったけど、その前にリッケンバックってのがあったね。ソリッドでリッケンバックのギターがあって、ギブソンがまだエレキを作らないでアコースティックばかり作ってて、その頃に電気楽器を先に作ったのはリッケンバックだったね。そのうちにギブソンもエレキを作り始めたわけ。リッケンバックが作り始めた頃に日本に入ってきたやつが…。

●ひょっとしてディック・ミネさんが使ってたやつですか？

○そう、ディック・ミネなんか使ってたね（笑）。ミネさんもけっこう浮間の工場へギターを買いにきたけど。アンプをくれとか言って。せがれが欲しいがってるからひとつ分けてくれとか言ってきたことあった。まあ、エレキ・ギターを一番最初に使い始めたのはミネさんだろうね。リッケンバックはまだあるんでしょ。でもあまりパツとしないね。

●でも人気ありますよ。なんといってもビートルズが使ってたからね。

○ああ、そう？ ビートルズはリッケンバック使ってたの？ ああ、そう。とにかく一番最初にエレキを作り始めたのはリッケンバックだよ。ギブソンなんかずっとのちだし、エビフォンなんかものちだ。俺なんかが大学の…。18か19の歳だ。俺がだよ。これはいいなあと思ったよ。

●ところで、『エレキの若大将』ではみんなテスコのギターを使ってますね。あれはつまりプロモーションなんですか？

○あれはうちでタイアップしたんだから。あれはナベプロ。ナベプロとうちはタイアップしていろんなことやってたわけ。エレキの大会があるでしょ。H劇とかさ。コンテストじゃなくてプロのステージも。ああいう時にアンプがいるでしょ。それぞれみんな持ってるけど、いちいち取り替えてたらステージが大騒ぎになるでしょ。だからジャーンとでかいのをバーンと揃えたんだ。うちがタイアップして。H劇のウェスタン・カーニバルやるのにはタイアップした方がいいだろうっていうんでナベプロとタイアップしたわけよ。そしたら加山雄三の『エレキの若大将』の映画があるんで、ぜひ乗ってこないかというんで、じゃあ乗りましよう。あの中で楽器店が出てくるんだね。あれ全部うちのギターだよ（笑）。うちが全部持っていて並べるから心配するな。パアッと並べて楽器店を作った。あれで売れたかどうかはちょっとわかんないけど。まあ宣伝ではそういうもんだからね。

●あの映画はナベプロの映画だったんですか？

○そう。ナベプロが主になってやったんだね。ナベプロが骨を折ってやって。砦の撮影所へ楽器を持ち込んで。楽器店のセットを作ったね。

●あの中でもエレキ・コンテストの場面が出てきますよね。

○そうそうそう。うちはタイアップするから、絵を見てもらわなきゃ困るから、切符をあらかじめ配ったりしたことあるよ。大変な忙しうだね（笑）。

●じゃ世間ではホントにあの映画のような盛り上がりだったんですね。

○そうそうそう。

●あの時加山さんはMJを使ってますね。

○そうかもしれないね。そんで、セリフがあるんだよ。

番号を言うセリフが。

●ああ。“これがボリューム・コントロール。これが…”とか言うヤツですね。

○そうそう。誰かに教える場面だったかな。

●寺内さんが出前持ちの格好して出てくるところなんです。

○そうそう(笑)。あんたよく覚えてるね。寺内はなかなか面白い奴だね。エレキのバンドは鍵盤楽器も使うから、僕が(オルガンを)作ってるっていうことを知って寺内が欲しいって言うわけ。池袋のどこかに出てくるから持ってきてくれるって言うわけだ。で、僕が持ってたのかな。そしたら置いていってくれて言うから、ダメだって言っただよ。寺内さんかなんか知らないけど、初めてなわけだ。楽器を持ってきて金ももらわなくて置いていってくれなんていうのはダメだって持って帰ってきたんだ。そしたら怒ってね(笑)。“俺は寺内だ!”ってカンカンに怒ってるわけよ。でもそんなことがあってから寺内と仲良くなっちゃってね(笑)。“お前のこのアンプはいいから使ってやるから”って言い出したから、そっから一生懸命使われてたね。

●どのアンプを使ってたんですか?

○チェックメイトだ。チェックメイト100。100Wのヤツを作って、寺内さんに様子を見てくれと。宣伝になるからひとつ進呈するからって。

●ギターはあんまり使わなかったんですか?

○ギターも使ったよ。だけどそのうちにモズライトを使っただんだ。

●橋本さんがモズライトを初めて御覧になったのはいつ頃ですか?

○ベンチャーズだろうね。

●実際に取ったことはありますか?

○触ったこともあるな。わりと良かったよ。エレキの頂点へきてからでいい楽器だったね。形も悪くなかったしね。あれは俺もいいなと思ったね。

●モズライトは当時アマチュアの間ではどんな存在だったんですか?

○アマチュアで使う人はほとんどなかったね。モズライトを持ってないから、和製のテスコにしても何にしても使わないう感じだったかもしれないね。終わり頃はね。モズライトはいい楽器だよ。

●エレキ・ブームをどう思いました?

○俺の歴史から言えば、ビートルズが武道館へ来た頃はもう末期ね。もう終わり頃…。何しろね、エレキなんてものは、こんなに便利が良くていろんな音が出るものかなんて流行らないのかな、なんて商売にならないのかなと思う期間が長かったね。それでやっとな、朝鮮戦争の時のブームで楽器が少し出るようになって、それでもまだ大したことはないなと思ってうちにベンチャーズのレコードが入ってきて。でも先に気づいたのは米軍の子供たちだった。日本人が始めたのは遅かったね。それで彼らがやってきたら、ワッ!と火がついたんだね。

2. 元デザイナー 北川広志氏インタビュー

現在も工業デザイナーとして活躍する
北川氏にも当時を語っていただいた。

●具体的に北川さんがやられたギターはどれになるんでしょうか?

○その年度内(昭和40年)に出たのはほとんど。

●Kはそうですね?

○Kは一番好きでしたね。

●Kのピックガードはアルミですよね?

○アルミです。デザインの方としちゃ、あの当時エレキは最先端でしょう。それに対してプラスチックあるいはセルロイド系のものになると、なんかこう古いものを引きずってるみたいで、エレキっていう電気的なイメージからちょっと違ってたんで、アルミはどうなのかなあっていう感じで。アルミにしたら音がどうのってことはなかったですけどね。もしかしら技術の方では音のことも考えてたかもしれないですけどね。もしかしらそれでアルミでデザインしろという提案があったのかもしれないですけど。アルミというのは、今だったらチタンのようなイメージですよね。そういう感覚でたぶんアルミを使っただけでしょうね。

●スペクトラムはボディにカーブがついてますが、どうしてこうしたんですか?

○“板ンパ”っていうイメージをなくしたかったんですよ。プラスチックの整形でできたような質感というか、柔らか味っていうか。デザインする時に非常にいい話を聞きましてね。これは末長さん(当時の技術者)が言ったことなんです。特に楽器なんだから、手元に引き寄せて撫で回すようなものを作りたいなと。彼が僕に最初に言ったのがそのことだったんですよ。いつも拭いて磨きたくなるような感じにしたいと。塗装する前は板ンパみたいな感じですよね。そのイメージをなくすためにRのデザインになっちゃったんです。堅い直線的なところをなくして曲面を多くすること。ボリューム感を出すということ、柔らかさを出すということ。あと、グレード・アップを狙っていることでしょうね。色に関しては橋本さんのアドバイスに従ったという感じでしょうね。

●エレキ・ブーム時の縞々模様はどなたのアイデアなんですか?

○もう忘れちゃったね。この時は、この模様とかイチマツの模様とかランダムな不規則な模様とかいろいろあったと思うんですよ。こちらは提案者ですから。いろんな提案があって、最終的にこの個性で選んだのはやっぱり橋本さんですね。

●この縞々模様がこの時代のエレキの特徴になりますよね。グヤトーンなんかもこうなったし、全音なんかもやりましたけど。

○いい悪いじゃなくて、大きな流れが正義みたいになっちゃったことがよくあるでしょ。当時としてテスコのギターは絶対量が多かったし、テレビとか媒体も使ってたし、ライトが当たるステージで使われるギターっていうと、やっぱりテスコの商品が多いですよ。そんな時にこの縞々はクリアなところはスパーンと光って、“なしじ”がかかるところ(腐食しているところ)は真っ黒になったり、その対比がすごく激しくて、アクセントが強いですよね。で、いい悪いは別にして、あれがエレキだ、みたいな。そんな風な代名詞的なものになっちゃったんですよ。だから、デザインの方で、この縞々がいいからぜひ採用してくれというあれはなかったですけどね。デザイン的には荒すぎる印象があるけれども、その辺の具体的な効果であるとか他のものに対する創意性であるとか、その辺を総合的に判断してこれをやっちゃったのはやっぱり橋本さんじゃないのかな。マルチ人間でしたね。僕はあの時学校出たばかりで、工業デザインということをやったけれども、経験なんてないに等しいですよ。だから、意識しなかったけれども橋本さんの手足でやってたっていう程度のもんじゃないですか。だけど、あんな面白い会社はなかったっていう感じだから、みんながみんなそうじゃないけれども、いい商品もあったんじゃないかな。テスコには優秀な連中がたくさんいたなと思いますよ。エレキのブームが終わってもちよつとまよくやってればもっと面白い会社になってたでしょうね。それは経営者の才覚なんだけど。だからテスコっていう

と即橋本さんの会社っていう感じ。

●橋本さんというのはどういう存在だったんですか?

○橋本さんにはいろんなことを教えてもらったし、こういう仕事をやる上での財産という、橋本さんの教育を受けたということでしょうね。人との接し方とかね。あそこはいろんな切れる連中がいっぱいいたんで、すごい熱気でしたしね。やっぱりあれだけ作って売れるっていう感じになればみんな面白くなっちゃうでしょうし、すごく熱気があったし。その熱気の中で仕事ができたといいのかな。その軸になるのは橋本さんがいたことなんじゃないかな。橋本さんがあってこそそのテスコっていう、そんな感じがしますね。あの時橋本さんもいくつぐらいだったのかな。例えば、テスコ協賛ということでテレビ番組作ったりなんかするでしょ。そうすると、舞台上商品あげたりしますよね。動作から考え方から、いい意味でアメリカンぽいんですよ(笑)。舞台へ出てってギターをあげる時に、ビョンビョンビョンと飛びはねてってコロコロとあげたりね(笑)。会社の経営者がそれらしく動くっていうやり方じゃなくてね。そういう意味ではいろんなことがずいぶん勉強になりましたよ。テスコっていうより橋本さんという感じだったな。それと、セクションセクションで今から思うと、あのあと活躍してる人たちを見てるとやっぱりすごく能力のある人間が揃ってましたよね。

●北川さんと吉沢さん(もうひとりのデザイナー)がお入りになってから、橋本さんはほとんどデザインには携わらなくなったんですか?

○いえいえ。決定者ではありましたが。われわれの上司であつたし、デザインの責任者ということには変わりはないですね。だから営業の長であり、テスコの若い連中を引っ張っていく人間的な長であり、デザインの長でもありました。もう橋本さんあつてのテスコですよ。

ハウンド・ドッグ・テイラーのギター



ソノ筋では有名なハウンド・ドッグ・テイラーのギター。これは「HOUND DOG TAYLOR AND THE HOUSE ROCKERS」というアルバム(輸入盤)のジャケットに写っているものだ。このゴテゴテしたルックスからファンの間ではテスコ、あるいはテスコ・ブランドのカワイなどと言われていた。どう見ても日本製なことは確かである。また、このギターはフジゲン株式会社会長の横内氏が富士弦の歴史を綴った「グレコの仲間たち」(電算出版企画)のP163に載っている。このギターを横内氏に見せたところ、“これは私が作ったヤツだね。私の方で初めて型を起こして作ったのかな。絵を書いて。懐かしいねえ”という答えが帰ってきた。つまりこれは富士弦楽器のギターだったのだ。昭和39年頃のモデルで、アメリカにも輸出したそう。しかし、残念ながらバイヤーズ・ブランドはわからなかった。これを橋本氏にも見せると、“これはテスコじゃない”と一喝…。ハウンド・ドッグ・テイラー・ファンには嬉しいお話でした。